新聞記事スクラップ

1995 年（平成 7 年）から 2006 年（平成 18 年）までの、帯広の森市民植樹祭・育樹祭などに関する主な新聞記事を集めました。

（記事提供：十勝毎日新聞社、北海道新聞社）



帯広の森の20年つづる

植樹祭実行委 記念史が完成

帯広の森の二十周年記念「一実行委員長」が記念事業の一環で作成したもの。「帯広の森 私たちと帯広の森づくり」がこのほど、頴谷長は「二十年を迎え発刊された。帯広の森市民、広の森の歴史をまとめたも植樹祭実行委員会（棚瀬善一の。市民に森への取り組みを知ってほしい」と話している。

記念史はA4判で二百五十ページ余り。二十年史編さん委員会を組織し、昨年四月以降、本格的に編集に取り組んできた。植樹祭を中心に森の歩みをつづり、カラー写真や森の周辺地図、市民の作文、帯広の森に関する論文などを掲載している。

事務局の山田英和氏は「作業を通し街づくりの労、協力、批判することの難しさに感動を覚えた。ただ、強いて言えば生態系の扱っこにある昆虫や細菌に触れられなかったのが残念」と話している。

実行委員会のメンバー（写真左から山田哲氏、棚瀬会長、山田英和氏）と記念史

記念史は二千部印刷。関係機関に配布した後、希望者に一部二千円で販売する。問い合わせは山田さん（☎4466）まで。

1995 年（平成 7 年）3 月 30 日
十勝毎日新聞



帯広の森植樹20年
タイムカプセル埋設

カプセルと銘板を前に棚瀬委員長（左）と事務局の山田英和さん。20年の森の歴史に感慨深げ

百年先に思い巡らす

帯広の森に託す思いを後世に―。帯広の森市民植樹祭は昨年、二十年の節目を迎えた。二十周年記念事業実行委員会（棚瀬善一委員長）は、市民から森に寄せる思いをつづった作文を公募し、森の歴史などを収めた記念史を編さん。この記念事業を締めくくるタイムカプセルの埋設が三十日、帯広の森運動公園の第二アリーナ裏側で行われた。

小雨のなか、実行委のほか作文に入選した小学生ら約四十人が集合。深さ約一・五㍍の穴に、森の造成計画書や記念誌を詰め込んだタイムカプセルを埋め、百年先の緑あふれる森に思いを巡らせ、スコップで土をかけていた。

フォト散策



「今の帯広市民の思いをどう受け止めてくれるのか楽しみ」。二十年の歴史を詰め込んだタイムカプセルを土中へ―

1995 年（平成 7 年）4 月 30 日
十勝毎日新聞



力を合わせて木造りに励む市民。大人も子供も笑顔いっぱい（伏古町内会）

帯広の森市民植樹祭

第21回帯広の森市民植樹祭が、14日午前10時から帯広の森（西23南5）で行われた。約5,200人の市民が参加し、壮大な緑の森造りに思いをはせながら植樹作業に励んだ。今年植えたのは、ハルニレやヤチダモなど約7,000本。小雨がぱらつくあいにくの天気となったが、団体や家族連れなどの参加者は、作業後、焼き肉を囲んだりコンサートなどの催しを楽しみ、自然の中での一日を過ごした。

（23面に関連記事）

壮大な緑の森造りに汗

市民5,200人心込め

ハルニレなど7,000本

小雨が降ったりやんだりする天気で、午前十時の気温は二二・〇度。参加者は帽子やかっぱを着込み、手にはスコップを持って集まった。

開会式で、高橋幹夫市長が「これからも帯広のシンボル、宝物として力を合わせて森を育てていきたい」と述べ、大分市緑の親善訪問団の濱原敏郎団長（大分市収入役）が「緑あふれる快適な都市を想像し、私たちも一本一本の苗に知恵都市の心を込めて植えていきたい」とあいさつした。帯広営林支局の成瀬美子さんが植樹指導をした後、森の少年隊の横山悠さん（栄小五年）が先頭に植樹宣言し、植樹に移った。

二十回までに植樹した苗木は八十九・六ヘクタール。延べ九万三千本を植樹した。今年は団体参加の八十九万九千人が参加し、約十七万本を植樹した。



大分市緑の訪問団との植樹の記念植樹。左から大分市議会議長、林正巳帯広観光協会会長、十勝青空レディの北亜希子さん、山本香苗さん、瀬尾一帯広の森市民植樹祭実行委員長、林業帯広の森市民育樹祭実行委員長

組のほか、当日やってきた家族連れを含め約五千二百人の参加となった。大人もトを立てるなどして、心地よい汗を流していた。

り起こし、植えた木のそばに思い思いに記念のプレー

1995年（平成7年）5月14日
十勝毎日新聞

緑あふれる豊かな森に

小さな苗に期待を込めて

帯広の森市民植樹祭

緑あふれる豊かな森に願いを込めて―。霧雨にぬれる帯広の森は、将来の緑豊かしい森に思いを託す人たちの笑顔が広がった。あいにくの雨にもかかわらず植樹祭への参加者は5,200人を数え、まちづくりへの熱い期待を小さな苗に注ぐ姿が会場のあちこちに見られた。

最後のすずらん娘の記念に

○…「最後のすずらん娘の記念として、四人で相談してボランギスランを植えました」と語るのは、第三代すずらん娘の原口富美さん（三）と服部一枝さん（三）。中井文子さん（三）と四人。中水敏子さん（三）は昨年の植樹祭が初仕事で「思い出に残っている仕事の一つです」。さらに四人は「一昨年の小雨は木にはいいんじゃないですか」などと話しながら、植樹した周りにすずらん娘らしく、スズランの苗を植えていた。

帯西幼稚園は今年で5回目

○…今年が五回目の参加となったのが帯西幼稚園（西二南四、遠藤崇浩園長。園児と父母合わせて三十人ほどが参加した。例年は作業に汗を流した後、ジンギスカンを囲んで親ぼくを深めているが、あいにくの悪天候のため、今年は記念撮影をして解散となったが、遠藤園長は「園児が自分の成長を木の成長と重ねてくれたのは大変素晴らしいことだ。今後も続けて参加していきたい」と話していた。

大分から車いすの参加者も

○…「植樹は初めての経験ですが、いい思い出になりました」と笑顔で話してくれたのは、大分市緑の親善訪問団のメンバーで、車いすに乗って参加した松尾義美さん。背丈に余る苗木を抱えながら、帯広の印象を「自然が豊かで、人に気持ちがいい所」と話し、他の団員とともにすがすがしそうな表情。終了後、池田、岡崎へとのスケジュールが詰まっていたため、ゆっくりとした様子だった。

大分市緑の親善訪問団を歓迎 レセプション

○…一行二十七人が植樹に汗を流した大分市緑の親善訪問団（団長・濱原敏市収入役）の歓迎レセプションが、十三日午後六時から帯広グランドホテルで開かれた。



夫市長ら二十五人の関係者が拍手で迎える中、一行が入場。高橋市長が「あすの植樹では北海道の自然を体で感じてもらいたい」と述べ、濱原団長が「ロケーションの違うこの帯広で親善を深めていきたい」などとあいさつした。

この後、林正巳帯広観光協会会長の音頭で乾杯、和やかに交流を深めた。



帯広の森の植樹は二十一年前に始まり、約九十秒に十八万本が植えられた。高さが十分を超え間伐やせん定が必要なものがあり、五年前から育樹作業が続けられている。

参加者は、専門家の指導を受けるとともに、早速間伐やせん定作業を開始。大きく生長したシラカバやカラマツ主体の下枝を払ったり、生育の悪い木を切り倒したり、慣れない作業に汗を流した。

帯広の森で育樹祭

市民四人が参加

秋の恒例行事となった帯広の森市民育樹祭（帯広市主催）が十五日、同森で開かれ、市民団体や家族連れ約七百五十人が参加した。

1995年（平成7年）10月16日
北海道新聞（夕刊）



苗6千500本

夢託し植樹

市民5千人

二十一回目を迎えた帯広の森市民植樹祭（市など主催）には、家族連れや団体など約五千百人が参加、樹齢を築く。八帯広の森の夢を託した。「立派な森に育て」―。過去二十年に植えた約十七万本に加え、今回はハルニレ、ヤチダモなど九種類、六千五百本の苗を用意。あいにく小雨模様となったが、十カ所ほど植樹には絶好の条件。市民のほか、大分市の緑の親善訪問団の一行もスコップを手に参加して一本ずつ苗木を植え、作業後はブルークラス演奏などを楽しんだ。願いを込めて苗木を植える市民ら＝帯広の森

1995年（平成7年）5月15日
北海道新聞

「豊かな森に」と願い込め

フォト散策



「さあ、立派な森を育てるぞ」―。ピッピっ子たちもふくらむ。

帯広の森市民育樹祭
枝払いに汗流す

「みんなで豊かな森をつくろう」―。第五回帯広の森市民育樹祭（帯広市、実行委員会＝林光美委員長＝主催）が十五日、帯広の森（南町南八線）で開かれた。七万本余りの樹木が植えられた。育樹祭は下枝払いや間伐作業を通して、その森を育てる」という市民運動が定着し、すっかり恒例の行事になっている。今年の作業面積は昭和五十七年に植えた三・五ヘクタール。

この日は五月に行われた市民植樹祭と同様に、曇り空のあいにくの天気。今にも雨が降りそうな空の下、午前十時から開会式が開かれた。林委員長が「道のりは決して平たいが、みんなで素晴らしい森をつくり上げよう」とあいさつ。参加者は持参したのこぎりを片手に次々と作業場所へ。高さ十メートル以上に育った木にびっくりしながら、余分な枝を丁寧に切り落とし、百年後の雄大な森に思いをはせていた。

文・原山知寿子
写真・山下 晃



スクスクと育った木の枝を払うのはもったいない!? 少々戸惑い気味に作業を始めた森の少年隊メンバー



「お疲れさま」―。作業も無事に終わり、みんなで記念撮影。落ち葉のじゅうたんの上に笑顔の輪が広がった

1995 年（平成 7 年）10 月 15 日
十勝毎日新聞

帯広の森

市民5千人参加し植樹祭

今年で22回、累計18万本に



力を合わせて植樹する家族

帯広の森市民植樹祭が十二日、同市西二条南六で開かれ、市民五千三百二十人が参加した。

帯広のまちを緑で囲むため、一九七五年から毎年行っており二十二回目、関会式で緑の少年隊の星田小雪さん（谷風小五年）が「二十一世紀に生涯友緑の故郷ができることを願い、私たちの手で帯広の西に植樹することを誓います」と宣言した。

今回の植樹場所は帯広川沿いの樹齢段丘の下面（三五ヘクタール）のため、ハルニレやヤチダモ、ハンノキなど郷性種も、高標幹大帯広市長と一緒に大分市の区画で作業を行った。

一回目からの植樹木は計十八万二千七百本、植樹面積は九八・六ヘクタールとなった。

1996 年（平成 8 年）5 月 13 日
北海道新聞（夕刊）

帯広の森「大きく育て」と願い込め





チビっ子も森づくりに一役（撮影＝山下徹）

大分市緑の親善訪問団との恒例の記念植樹。阿部利重大分市助役（右から4人目）広瀬和生大分市議会議長（同6人目）と大分いきいきレディ2人が、高橋市長（中央）らとハルニレを植栽した（撮影＝山下徹）

市民植樹祭 5300人が汗

ヤチダモなど 6千本植え付ける

【整理部＝原山知寿子】壮大な緑帯形成の夢をこめて、市民の手で二十二回目の植樹祭が十二日行われた。帯広の森（西二五南六）は十月の秋晴れのような大空で、雪に埋まり、関係者が除雪をして植樹した。この日は風もなく穏やかな植樹日和。約五千三百人が参加、六千百本余りを植栽した。参加者は記念植樹を楽しみながら、作業に汗を流した。（19面に関連記事）

二十一世紀にまたがる壮大な緑帯形成の基礎。水位が高い土壌に合ったヤチダモやハンノキなどを植えた。今回の植樹面積は帯広川の西側の緑帯約九ヘクタール。一年前十時からの開会式で、「将来『ふるさとの森』を通じて市民と緑化の意識が醸成し、身近な緑が増え、『楽しもう』ということばどおりになってきたのは大変嬉しい。帯広緑育協議会の岡田益義会長さんが植樹祭の意義を説明した。

三百人が参加、六千百本余りを植栽した。参加者は記念植樹を楽しみながら、作業に汗を流した。（19面に関連記事）

二十一世紀にまたがる壮大な緑帯形成の基礎。水位が高い土壌に合ったヤチダモやハンノキなどを植えた。今回の植樹面積は帯広川の西側の緑帯約九ヘクタール。一年前十時からの開会式で、「将来『ふるさとの森』を通じて市民と緑化の意識が醸成し、身近な緑が増え、『楽しもう』ということばどおりになってきたのは大変嬉しい。帯広緑育協議会の岡田益義会長さんが植樹祭の意義を説明した。

「田小雪さん（花園小五年）が元気良く植樹登録したあと、作業に移った。スコップを手にした参加者は次々と割り当ての場所へ「大きく育て」と願いを込めて、約五十センチほどの苗木を一本一本に植え付けた。

作業終了後には各弁当や振る舞い酒で乾杯がかわされ、緑豊かな街づくりを誓いあうことなくこだましていた。

1996年（平成8年）5月12日
十勝毎日新聞

"みんなの森"広がる笑顔



森のキャンバスに広がる笑顔―。帯広の各市民緑地帯の会場には十二日朝から、遠方や緑陵都市の大分市を含め、子供からお年寄り参加者広場に参加者が集った。季節外れの雪というお膳立てが付き、足場がぬかるなど、コンディションはいま一つ。この日も植え込まれるあいにくの空模様だったが、それぞれが"みんなの森"自慢にと植樹作業を楽しんだ。ステージイベントやゆでじゃがなどのフードコーナーも大盛況で、参加者は暖い緑を育んだ空気と振れ合う一日を満喫した。

帯広の森市民植樹祭

催し盛りだくさん

参加者、色濃い緑満喫

28人の訪問団 市民と共に汗

Q：帯広市の観光文化姉妹都市の大分市から今年も八人の緑の親善訪問団（団長・阿部利重大分市助役）が来帯し、植樹祭に参加、市民とともに作業に汗を流した。

三浦源一さん（花園南八十四線）。今回初めてとあれの北海道を訪れた。広大な空間に感激した様子で「こんな大きな植樹に参加できてうれしい」と目を輝かせて語っていた。

5歳の幼児も張り切って

Q：「帯広の郊外にも緑帯が広がるようになって、遠慮なく緑のある帯広空間を感じ楽しめる」と参加者の一人。今年初参加、八歳の緑の植樹を終えた。広大な空間に感激した様子で「こんな大きな植樹に参加できてうれしい」と目を輝かせて語っていた。

【整理部＝原山知寿子】

大分市民を盛大に迎えた歓迎レセプション



大分市緑の親善訪問団

レセプションで交流

大分市緑の親善訪問団を歓迎するレセプションが、十二日午後六時半から帯広グランドホテルで開かれた。

関係者約百十人が出席。訪問団が大分おなじみの「チキリンばんじゃ」の踊りなどパフォーマンスに続いて入場すると、会場は盛大な拍手に包まれた。高橋市長が「日ごろ大変お世話になっている大分市の皆様に歓迎の意を込めて一緒にやってこられてうれしい」と歓迎のあいさつ。

大分市議会緑化推進特別委員会会長の菊川一郎氏が「帯広の皆さんと和やかに懇親できた」と感謝。ジャガイモなど、十勝の食材をふんだんに使った料理を囲みながら、交流を深め合った。

訪問団は植樹祭や札幌などを回り、十五日に戻る。

1996年（平成8年）5月12日
十勝毎日新聞

大きく育って！願い込め森づくり

帯広の森で市民育樹祭

ノコギリを使って下枝払い。太い枝と格闘する子供たち



【政経部＝福島一人、佐藤いづみ】市民の手で森を育てる「第六回帯広の森市民育樹祭」が十三日午前十時から、帯広の森で開かれた。抜けるような秋空の下、チビっ子からお年寄りまで千人余りが参加。森林特有のしっとりした空気を胸いっぱいに吸い込んで、シラカバやエゾヤマザクラなど八千本余りの木の間伐や下枝払いなどを行った。

家族5人で初めて参加

○…市内大川町の会社員太田博英さん（ぺ）は家族五人で「初めての参加」。息ぴったりと親しむことが好きで、このような催しは子供たちも「大好き」と笑顔。長女の博美さん（ぺ）と二女の英美ちゃん（ぺ）らは、小枝拾いや落ち葉集めに追われ、「フウ、フウ」言いながら、作業を行っていた。

参加することに意義がある

○…「植え付けするどんぐりは、老人会のパークゴルフ大会で風山に行った時に取ってきたんですよ」と話すのは、高齢者学級西帯つばさ会の畑田アサ子副会長（ぺ）。毎年欠かさず、参加。今年は会長が参加できなかったため、副会長である高田さんが中心となり、子供から、上は八十歳までのメンバー十三人が育樹に汗を流した。「結構力仕事で、老人にはきついんですよ。でも、参加することに意義があるんですよ」と笑って三人で参加した。

貴重な交流の場に

○…「われわれの故郷の町名のように、大きな木になってほしいね」と、帯広大樹会の畑田康衛会長（ぺ）。この育樹祭は会員十人で参加した。総会以外ではなかなか交流の時間は取れないので、「この育樹祭は貴重な交流の場だよ」と言う。毎年欠かさず参加している宮坂みさ子さん（ぺ）は「普段は働いているので息抜きになります」と、木を束ねたり、雑草を抜いたりと一生懸命だった。

1996 年（平成 8 年）10 月 14 日
十勝毎日新聞

枝払いや間伐に汗

―帯広の森―

1065人参加し市民育樹祭

第六回帯広の森市民育樹祭（帯広市、同実行委主催）が十三日、帯広の森で開かれ、さわやかな十勝晴れの下、市民千六十五人が枝払いや間伐に汗を流した。

この日手入れされた木は、一九八〇年に市民の手で植えられたシラカバやマツなど八千五十本。帯広の森の整備の様子を見てもらうとともに、森づくりには地道な努力が欠かせないことを実感してもらうため、毎年育樹祭を開いている。

奥さんと子供三人で参加した市内の会社員太田博英さん（ぺ）は「仕事が忙しくて子供たちと一緒に遊ぶ機会がないので、参加してみました。自然の中で体を動かすのはいいですね」と気持ちよさそうだった。



「難しいなぁ」―下枝を切り落とすのも結構大変

1996 年（平成 8 年）10 月 14 日
北海道新聞（夕刊）

帯広の森を緑のふるさとに



はりきって植えるぞー。主催者から配られた苗木を抱え取るチビっ子。「全然、重くないよ」

【政経部＝猫屋一人】第十三回帯広の森市民植樹祭が十一日午前十時から帯広の森（西二南六）で開かれた。この日の帯広は厚い雲におおわれ、今にも雨が降りだしそうな天気だったが、朝早くからスコップを手に続々と市民が来場。気温七～七度（午前九時現在）と早春を思わせる寒さの中、チビっ子から初年寄りまで五千人が、五万の広い敷地に散らばり、木々を手際に植えた。（21面に関連記事）

市民植樹祭に5千人

大分市の親善訪問団を代表し、清瀬和弘大分市教育長（左から4人目）、阿部剛四郎大分市議会議長（同6人目）、大分いきいきレディ2人が高橋市長（中央）らと記念植樹



ミズナラやリンゴ 6千本植える

二十三年の歴史を持つ植樹祭を続けるまちにしようと節年末に延べ十二万人が参加、十八万六千本が植樹されている。この日は曇り空に加え、昨日からの雨で会場はぬかるんだ状態。例年よりもしまう」と挨拶を終えた。その後、森の少年隊で皆勤小五年の青水都夏さんが「二十一世紀には緑のふるさと

は主催者を代表して高橋幹夫市長が「肌寒い天気だが、植樹で市をおもらいたい」と歓迎の辞。作べ十二万人が参加、十八万六千本が植樹されている。この日は曇り空に加え、昨日からの雨で会場はぬかるんだ状態。例年よりもしまう」と挨拶を終えた。その後、森の少年隊で皆勤小五年の青水都夏さんが「二十一世紀には緑のふるさと



ドホテルで行われた。高橋幹夫帯広市長など関係者らが、大分いきいきレディら訪問団二十三人の来帯を歓迎した。姉妹都市提携三十周年を迎えた帯広と大分両市。植樹祭は第七回からの参加だ。高橋市長が「二十年前、皆さんが植えた苗もすくすく育っています」とあいさつ、清瀬閉会長が「十勝の雄大な自然を象徴する行事に参加できることはうれしい」とたたえた。里立善宏大分合同新聞社営業開発部長が乾杯の音頭を取った後、約六十人の出席者らはグラス片手に話に花を咲かせていた。

1997年（平成9年）5月11日
十勝毎日新聞

緑豊かな帯広願い

市民植樹祭 サクランボなど6千本



第二十三回帯広の森市民植樹祭が十一日、市内西二ソメコリンゴなどの果樹も五南六で開かれ、市民が苗木を植え込んだ。

学校や職場ごと五十三団体と、個人参加を合わせ五千二百八十人が参加、帯広市と姉妹都市提携している大分市からも「緑の親善訪問団」の二行三十五人が加わった。

植樹場所は帯広川西側の河畔堤防の高台部分約五ヘクタ。カシワ、ミズナラなど例年植樹している苗木に加

シャベルなどを持参した参加者は「立派に育って」と願いながら苗木を一本ずつ丁寧に植えていた。

緑豊かな街に、と願い植樹する参加者たち

1997年（平成9年）5月12日
北海道新聞

枝払いや間伐に奮闘

帯広の森育樹祭 1100人が汗を流す



未来の素晴らしい森を育てようーと、下枝払いに力を込める（撮影・折原徹也）

【政経部＝岡村裕、猫屋一人】第七回帯広の森市民育樹祭（実行委員会主催）が十二日、帯広の森（西二南五）で開かれた。秋晴れの下、子供から初年寄りまで千百人が参加。壮大な緑の森づくりに思いを寄せながらアカエゾマツやチョウセンゴヨウマツなどの下枝払いや間伐を行った。

今年の育樹祭は十四年前の一九八三年に行われた第九回植樹祭の際、植えられた一万二千本余りが対象。当時は人の背丈ほどの苗木だった木々は十数メートル以上にも成長している。

この日は最高気温が一二度と低くなり、午前十時から三度も低かった。しかし、風がなく真冬が還ったと、土と木のにおいを胸いっぱいに吸いながら少校生に二十二区画に分けた

敷地内で、開会式が行われた。はじめに林光繁実行委員長が「育樹をしながら、帯広の自然を十分に感じてほしい」とあいさつ。その後、緑の少年隊を代表して石黒司君（広陵小六年）が「きょうを楽しみにしていました。いつまでもこの森広の森を残していきたい」と育樹宣言した。

その後、長靴や軍手姿のグループや個人参加者が一斉に森に入り、下枝払いなどの作業を行った。恭祖優臣（はは看のさゆりさんたんに成長している。

この日は最高気温が一二手を引かれ、初参加の最初はチェーンソーの音にびくりした様子だったが「頑張るぞ」と声を掛け合いながら作業に集中していた。

1997年（平成9年）10月13日
十勝毎日新聞

1998 年（平成 10 年）5 月 17 日
十勝毎日新聞

帯広の森市民植樹祭

100年後に思いを描く



「大きく育って」と子供たちも緑づくりにひと役（写真・山下徹）

【政経部＝岡村記】第二十五回帯広の森市民植樹祭が十七日午前十時から帯広の森（西三南六）で開かれた。暮り空でから雨がぱらつくあいにくの天気となったが、会場には朝早くから約五千人の市民が続々と詰め掛けた。晃勝らしいい森づくりにある植樹会場で、参加者らは百年後の壮大な森を思い描きながら、作業により地よい汗を流した。（21面に関連記事）

「しっかり根付いて」

1本1本に 5千人が心地よい汗





今年も大分緑の訪問団と記念植樹。初参加の砂川市長（左から5人目）、護大分市助役（同4人目）、大分いきいきレディ（同3人目）らがカシワを植えた

二十一世紀に夢たがる壮大な帯広の森計画には、これまで延べ十二万五千人が参加、十九万二千本が植樹されている。

午前十時からの開会式では主催者を代表して砂川敏文市長が「植樹祭は森と人間が共生できる地域づくりの出発点。百年後の姿を夢みながら一本一本に心を込めて植えていきたい」とあいさつ。観光文化姉妹都市・大分市の訪問団長を務める護雅行大分市助役が「広大な森造成を機会に進めている市民の一本を千一本に土に埋めた今年も大分から訪問団がやってきます。どんな森ができるか楽しみです」とあいさつ。

今年も大分から緑の訪問団

【政経部＝岡村記】植樹祭に先だち、十六日午後六時半から、大分市緑の親善訪問団（団長・護雅行大分市助役）の歓迎レセプションがレセプションで歓迎を受ける大分緑の訪問団の一行

ンが帯広グランドホテルで行われた。砂川敏文帯広市と、護助役が「皆さんが植えた木は、森として育なと歓喜ていきます」とあいさつする長など関係者ら約、大分いきいきレディら訪問団二十五人の来帯を歓迎した。

一九六六年に航空姉妹都市として、九二年からは観光文化姉妹都市提携をしている間柄。植樹祭には第七回から参加している。砂川市長が「皆さんが植えた木は、しっかりと根付くよう願いを込めて、植樹祭を楽しめるように現で願い会場は、帯広の森道成計画の中で、異樹林・開たかのように周が降り出し花園木として整備が予定されている地域で、将来は広大な森の中で、家族らがコンサートやゲームに楽しいときを過ごしていた。

植樹作業終了を待っていが、広大な森の中で、家族らがコンサートやゲームに楽しいときを過ごしていた。



あいにくの雨の中、今年も国際色豊かに植樹が行われた

帯広の森で市民植樹祭

"みんなの森"育てよう

【政経部】壮大な森を市民の手で―。帯広の森市民植樹祭の会場には十七日朝から続々と市民が集まった。小雨模様の天気となったが、今年も海外や姉妹都市、子供から お年寄りまで幅広い参加者が集まった。恒例のブルーグラスコンサートでは「帯広の森テーマソング」が披露され、バザーでは山菜のてんぷらなどが大盛況。参加者は濃い緑や澄んだ空気と触れ合いながら一日を満喫、〝みんなの森〟を目指して植樹に汗を流した。

娘と一緒に楽しく初参加

Q…「緑や畑はあちこちにあるが、人の入れる森って意外とがないんですね」。初めて参加する帯広市緑化センターの北村美穂子さんと二歳に参加した。スコップで土を掘り起こし、三人で二本の木をしっかりと植樹した

雨は木のためにいいですね

Q…「この天気は木のためにはいいですね」とイングリッシュハウス・ジョイのディヒット・キャンベルさん（26）。植樹祭には六年前から参加している。今回は生徒や講師ら十人で植樹した。ディビットさんは「参加してから、当日は雨の日が多いです。今回は寒くていやだったが、雨は木を成長させるのが楽しみです」と笑顔を見せた。

成長した木を見るのが楽しみ

Q…「お母に植樹祭の案内を見て、家族で参加した。小さい子供たちが喜んでいた。今年は気持ちが晴れしますね、来年もきっかけがんです」と話すのは、市内に小規模店「豊乃屋」を営む小椋豊さん（34）。開店は今年五周年を迎えることから初参加した。二十本の植木を従業員と植樹祭会場のせ十人で植えた。小椋さんは「気持ちが晴れしますね、来年もきっかけがんです」と話すのは、市内に小規模店「豊乃屋」を営む小椋豊さん（34）。開店は今年五周年を迎えることから初参加した。二十本の植木を従業員と植樹祭会場のせ十人で植えた。

桜の森公園の植樹をする帯広ライオンズクラブ



桜の森公園計画で

成木加本を

帯広ライオンズクラブ

【社会部＝山本徹】帯広ライオンズクラブ（三浦政勝会長）は、創立四十周年記念事業の「ライオンズ・桜の森公園」（桜森）の植樹を、十七日午前八時半から帯広の森で行った。

同公園は帯広の森内の西二〇〇六、北海道国際センターの北側斜面約二・七ヘクタールの

1998 年（平成 10 年）5 月 18 日
北海道新聞

「100年の森」へ第一歩

池田 開町祝い千5百本植樹

帯広では市民植樹祭



植樹に汗を流す町民たち

若葉がまぶしい季節を迎えた十七日、緑に親しむイベントが帯広と池田で開かれた。帯広と池田では一世紀へ向けた緑づくりを目指し住民が植樹したほか、芽ぶきで植物を採った野草を食べる会も開かれ参加者は緑の恵みを堪能した。

今年の池田町開町百年記念の町民植樹祭が十七日、池水公園で行われた。開町百年記念事業には、ベントが帯広と池田で開かれた。帯広と池田では一世紀へ向けた緑づくりを目指し住民が植樹したほか、芽ぶきで植物を採った野草を食べる会も開かれ参加者は緑の恵みを堪能した。

今年の池田町開町百年記念の町民植樹祭が十七日、池水公園で行われた。開町百年記念事業には、千人以上が参加。数十年後の緑林を夢見て、町木のサクラや、カシワ、町花のツツジなどを合わせて二十種類千五百本を約四キロに植えた。〈池 田〉

第二十回帯広の森市民植樹祭は十七日、地域や職場の団体、姉妹都市の大分市からの緑の親善訪問団二十五人など、総勢約五千人が参加して市内西二条南六の帯広川畔で行われた。帯広の街を緑で囲む「帯広の森」を目指して、今年は四・三ヘクタール二千二百十三本を植樹。ミズナラやカシワ、ナナカマドなどのほか、果樹や花の咲く木の林も整備するためサクランボやエゾヤマザクラなども植えられた。〈帯 広〉

二十七回目の今年は十勝をはじめ釧路や富良野などから五十四人が参加、自然の味を満喫した。

参加者は、食べられる野草の見分け方や調理法の説明を受けた後、早速、野草を探しに出かけた。雨がぱらつくあいにくの天気だったが、一時間ほどかけてエゾイチゲやニリンソウなどを熱心に採取。採った野草をてんぷらにして味わっていた。〈芽 室〉



苗木を植える帯広の森市民植樹祭の参加者

芽室で野草を食う会

芽室町新嵐山スカイパークでは、身近な野草をもっと知ってもらおうと十七日、「野草を食う会」（芽室町新嵐山スカイパーク主催）、芽室自然を知る会、芽室町新嵐山スカイパークで開かれた。

1998 年（平成 10 年）10 月 25 日
十勝毎日新聞



間伐や下枝払いなどに取り組む参加者（写真・折原徹也）

大きく育て帯広の森

間伐や枝払い 1100人が汗流す

第8回市民育樹祭

【政経部＝本田裕一、池田有紀】市民ら千人が間伐、下枝払いをして帯広の森を育てる「第八回帯広の森市民育樹祭」（帯広市、同実行委員会主催）が二十五日、同市西二―南六、南町南六線の会場で開かれた。三十八団体約千百人が帯広の森で心地よい汗を流した。

今回の育樹祭では、一九八一年の第七回植樹祭、八四年の第十回植樹祭で植樹の森がもっと大きく育って十本を育樹した。十八日の開催を予定していたが、雨のため二十五日に順延した。

この日も朝から雨が降り、あいにくの天候だったが、明け方には雨がやみ、午前十時から予定通り開会式を開いた。帯広市長代理の渡辺利護助役のあいさつに続き、林業試験場道支場長が「市民の皆さんのボランティアで素晴らしい森に育ってほしい」とあいさつ。事務局から育樹指導と作業上の注意があり、森の少年隊の瓜生光喜（会社員）が「将来に残したい」と話していた。

会場では、ドングリを集めるどんぐりはかりが開設され、森から出る間伐材を利用した「ミニチュアアート」を作る会」も開かれた。

四郎さんは「毎年来ているので、木々が育っているのが分かる。良い環境をつくるのが分かる。良い環境をつくるのが分かる。良い環境をつくる



「一緒に一緒に」「大きく育ってね」。子供たちも壮大な森づくりに一役（写真・折原雅也）

1999年（平成11年）5月16日
十勝毎日新聞

帯広の森市民植樹祭

青空の下 5千人が汗

カシワなど6千200本植える



大分市の緑の親善訪問団を代表し、木本団長（右から4人目）や大分いきいきレディらが砂川帯広市長（向う5人目）らと記念植樹

【政経部＝池田有紀】第五十五回目の市民が訪れ、二十五回帯広の森市民植樹大きく育つように願いながら植樹作業に励んだ。市民が帯広の森（西二五南五）で木の手で一本一本に植えられた苗は帯広の大地にしっかり早朝から青空が広がり、絶と根を下ろし、百年後には好の植樹日和。会場には約壮大な〝市民の憩いの森〟が完成する訓練だ。

（19面に関連記事）

岡植樹祭は一九七五年からスタート。これまでに延べ十二万人が参加し、十九万八千本を植樹している。今回の植樹会場は帯広川西西小学校児童生徒の加藤紫祐君らが「立派な緑のふるさとができるよう願い、私たちの手で植樹します」と元気に植樹を宣言した。

今年はダンやヤマグワなど十二種類約六千二百本の樹木を用意。参加者たち一日を過ごしていた。

続いて、森の少年隊で帯広はスコップを片手に一本一本丁寧に植え、育てと生い茂ったこの日年後の森を脳に描みながらしっかりと土を踏み固めた。作業終了後は、新緑の中で昼食を広げたり、コンサートに耳を傾けたりなど十二種類約六千二百本と、家族や仲間で思いかなの樹木を用意。参加者たち一日を過ごしていた。

1999年（平成11年）5月16日
十勝毎日新聞



帯広の森 市民植樹祭

緑多き街に…願い込めて

家族らイベントも楽しむ

【政経部、社会部】市民の手で豊かな森を創（つく）ろう。すっきりと晴れ渡った空の下、帯広の森市民植樹祭の会場には十六日朝早くから、大勢の参加者が集まった。参加者たちは、森が将来市民の憩いのふるさとになるよう願いを込め、心地よい汗を流した。会場では、恒例のアルプスコンサートやバザーなどのイベントも開催。家族連れらは穏やかな春の風に包まれながら、一日を満喫していた。

義夫さん（六）ご一家の長男由夢ちゃん（三）、瑞樹ちゃん（二）と一緒に十九本の苗木を植樹した。この日は五年生の誕生日で、記念の植樹とになった。「植樹祭には毎年来ているんですが、今回は力が入ります。きょう植えた木と一緒に、元気よく大きく育ってほしい」と、スコップを握る由夢ちゃんの姿に目を細めていた。（本田裕二）

木と一緒に元気よく育って

娘の誕生日に

Q：帯広市内の会社員谷

立派な森の完成が楽しみ

ふじ町内会

Q：町内会単位の参加もあり、そのうち、ふじ町内会（藤川松二会長）は会員十人が参加。「九年前に町内会ができてから毎年植樹祭に参加している。このうちに立派な森が完成するのが楽しみ」と苗木を次々に土に埋めた。親子で参加した植本健太君二つは「木が成長して疲になったら、ペットを連れて散歩したい」とスコップを持つ手に力を込めた。（池田有紀）

故郷の国でも植えてました

帯大留学生

Q：「故郷の国でも参加と植樹をずっとやっていたんですよ」。初めて参加したナイジェリアの帯広畜産大学留学生、サニー・ヤハヤさん（三）。「木は環境を整える。植樹は大切なこと」。ナイジェリアでは国家の砂漠化を抑えるために植樹を行っていたという。今回は「に、朝から植え方を「一人一人教え求した」と笑顔で話子供たちと参加。「きょう」初めて木を植える子供たち」していた。（浅井文人）

1999年（平成11年）5月17日
北海道新聞



帯広の森では 5千500人参加

きた緑の親善訪問団の一行三十六人を含む約千五百人が参加した。

今年は活発にエゾオオヤマザクラやカシワなど地元の自然林の樹種に加え、エンヤマザクラやエゾノコリンゴなど花木を多く植樹。植樹祭は一九七五年から始まり、今年で二十五回目。姉や実のつく樹木の苗なども合わせ六千二百四十本が植えられた。この四半世紀で約四十七二十万本を植樹したことになる。

森の少年隊の加藤紫祐君さん（帯広小五）が「二十一世紀に立派な緑のふるさとができることを願いま す」と植樹宣言。参加者たちは笑顔の下、立派に育つよう願いながら各木を一本一本植えていた。

大分市緑の親善団来帯

成功祈り歓迎レセプション



植樹祭の成功を祈って乾杯したレセプション

【政経部＝池田有紀】帯広の森市民植樹祭（実行委員広市と観光文化姉妹都市の関係にある大分市から「大分市緑の親善訪問団」の一行三十六人が来帯し、歓迎レセプションが十五日午後六時半から、帯広プラザホテルで開かれた。

一行は公式訪問団十一人と観光ツアー客二十五人で構成し、植樹祭の参加は十九回目。この日は植樹祭実行委員会の約六十人が出席した。

砂川敏文帯広市長は「地域づくりの象徴として森を育てたい。植樹祭ではいい汗を流し楽しい思い出をつくってほしい」と歓迎のあいさつ。木本哲郎大分市水道事業管理者が訪問団を代表し「帯広、大分両市の友好親善のためにも植樹祭の成功を祈念する」と述べた。

衆院議員、山田英和実行委員会事務局長のあいさつに続き、大濱貢良帯広観光協会会長の発声で乾杯した。

出席者は、十勝の食材を使った料理に舌鼓を打ちながら歓談し、吉野幸夫大分商工会議所副会頭の呼び掛けで万歳三唱した。



元気に育て 帯広の森

間伐や枝払い 600人が汗流す

第9回市民育樹祭

【政経部＝池田有紀】市民の手で樹木を手入れし、健全な森を育てる「第九回帯広の森市民育樹祭」（同実行委員会、帯広市主催）が十七日、帯広市内南町南八線と芽室町北伏古の両森で開かれた。時折雪がちらつく寒さの中、三十四団体約六百人が参加して作業に当たった。

今回は、一九八四年の第十回「緑樹祭」で植えたトドマツやカシワ約二万本の間伐、下枝払いをした。開会式では砂川敏文市長が「人間社会と共生できる森を市民の手で育てていくことが大切」とあいさつ。林業実行委員長が「この事業を息長く継続させるとともに、今後の展開を皆さんと考えていきたい」と述べた。事務局による育樹指導の後、森の少年隊の藤田梨加さん（明星小六年）が「自由に自然と触れ合うことができることを願って育樹作業をすることを宣言します」と誓いの文を読み上げた。

参加者たちはのこぎりを使って作業に取り組み、一時間後には森はすっきりとした。植樹・育樹を積極的に行っている帯広の森に長ぶりが感じられた。子供たちの代に立派な森を残したい」と話していた。十八、二十一日には近郊の小中学生も育樹を行う。



雪が舞う寒さの中、枝払い作業に当たった（写真・川崎望子）

1999年（平成11年）10月17日
十勝毎日新聞

大きな森になれ 間伐など熱心に

市民育樹祭

「第九回帯広の森市民育樹祭」（同実行委主催）が十七日、市内南町南八線などで開かれ、小学生からお年寄りまで約六百人が参加した。

肌寒い天候の中、作業に先立ち、砂川敏文帯広市長があいさつ。この日は十五種ほど同じに植樹された約二万本の樹木を対象に、参加者が下枝払いや間伐に取り組んだ。

作業は「森の少年隊」の藤田梨加さん（明星小六年）が元気よく育樹宣言した後、各団体ごとに分かれてスタート。参加者たちはシラカバやトウヒなど、地面から約一・八mはえた枝のコブ。枝を切り取る作業に汗を流していた。



寒風の吹く中、枝払い作業に取り組む子供たち＝帯広の森

1999年（平成11年）10月18日
北海道新聞

2000年（平成12年）5月21日
十勝毎日新聞



みんなので手で立派な森をつくろう一。将来の森を思い描いて、子供たちもお手伝い（写真・川崎想子）

大きく育て帯広の森

市民植樹祭 5200人、心地よい汗

【帯広部＝池田有紀】今年で二十六回目を迎える「帯広の緑の森市民植樹祭」（同実行委員会、帯広市主催）が二十一日午前十時から、帯広川西二丁目西公園で開かれた。この日はあいにくの曇り空だったが、会場には約五千二百人の市民が訪れ、廿六年後の完成を夢見て植樹作業に励んだ。百年計画の森づくりは順調に進められており、計画の四分の一を超えた今回も、カシワやアスナシなど約六千四百本の苗木が市民の手で植えられた。（20、21面に関連記事）


大分市緑の親善訪問団の大分いきいきレディらも砂川市長、青空レディと一緒に植樹

カシワやアスナシ 6400本

植樹祭は一九七五年から「緑どりしてこれからも大事にスタート」。これまでに延べ一万五千人が参加し二十万四千本を植樹している。今回の会場は「帯広川西緑ヶ丘公園」の南側にあたる区域約三・八ヘクタール。帯広の緑豊かな街づくり基本計画にもとづき、自然林と景観林に区分けし、ふるさとの森」として整備される予定だ。

開会式では、砂川敏文市長、山田英和緑豊実行委員会事務局長が「この植樹祭を帯広のまちづくりの象徴の一つとして育てていきたい」とあいさつ。続いて、参加した二つの「緑の少年隊」の代表、大分市立大分西中学校二年の佐藤仲間君と帯広市立緑陽中学校二年の鈴木美穂さんが「緑の里小学校、五年一組一九十二グループが参加。木の成長と共にグループの交流を深めよう」と誓いの言葉を述べた。

式典後は、早速植樹会場に移動。参加者たちは、苗木に記念ボールを立てていくと、大きく育つよう二本一本に願いを込めて、子供たちも参加した。

会場には、木工教室なども開催され、子供たちのにぎやかな声が森に響いていた。

2000年（平成12年）5月21日
十勝毎日新聞



緑豊かな街つくろうよ

帯広の森 市民植樹祭

「張り切って植えるぞ」開会式を終え、植樹会場に向かう参加者たち（午前10時半、写真・川崎想子）

職場仲間や家族で

気温11度 肌寒さにもめげず

【政経部】市民の手で緑豊かな街をつくろう！。毎年恒例となった「帯広の緑市民植樹祭」の会場は二十一日朝から、大勢の市民で賑わった。この日の気温は正午で一〇・八度（帯広）と昨年を大きく下回る肌寒さだったが、職場仲間やサークルなどグループ単位での参加も多く、互いの交流を深めながら植樹に励んでいた。

発足20周年で交流深めよう

公園前日町町内会

○…公園前日町町内会（真由美会長）の会員約二十六人（成田昭雄代表）は町内会発足二十周年を記念し植樹した。「二十年を機にコミュニケーションを深めよう」と成吉昭代表さん。「昨年は会員それぞれが職場など別々な場で参加しており作業は賑やか。それぞれ苗木を植え終えた後、「みんなでこうして集まると、張り切って一人で五本植えた会員もおり、本当にいい汗を流した」と記念の看板を前に楽しそうに写真撮影をした。

移住1年結婚10年記念です

家族4人で

○…市内の会社員小西孝さん（35）も、妻麻由美さん（35）、長男雄祐君（3）、二男編人君（1）と参加。「昨年六月に会社の転勤で香川県から帯広に移り、ちょうど一年たった記念に」と笑う。

真由美さんも「結婚十年というきりもあって私も植えようと思っていました」が、子供たちが喜んじゃって私の分まで植えてしまいました」と笑顔。

初参加で意欲

「来年以降も」

市議会議員会

○…帯広市緑会議員会（大野正光会長）は午前八時半から、市内西二の南六の緑の交流館・十勝への道沿いにカエゾマツ三十八本を植樹。緑豊かなまちづくりを目的に、水野会長の呼び掛けで初めて実施した。

議員や砂川敏文市長ら約四十人が、作業着姿で集合し、スコップで穴を掘って、次々と苗木を植えていった。

水野会長は「来年以降も続け、市民植樹祭の範を示したい」と話していた。

空気きれいにとても良いこと

世界の友達チーム

○…国際協力事業団（JICA）研修員も参加。研修員の外国人も「世界の友達」チームとして参加。

ケニア出身のマーティン・ムインデさん＝ほかセーターを着込んで防寒対策も万全に。「国内でも植樹祭はあるが、まきや家の屋根などに使うための木を植えるので、帯広の植樹祭とは目的が違う。緑は空気もきれいになるし、とても良いこと」と話し、木を植えた後の土をすき起こして固めていた。

2000 年（平成 12 年）5 月 22 日
北海道新聞

緑の新世代 6400本を植樹

帯広の森で市民ら参加

第二十六回帯広の森市民植樹祭が二十一日、帯広市西二南五の会場で行われた。統計都市の大分市から千人が参加し、約二十二万五千本を植樹している。砂川敏文市長が「まちづくりの象徴として『森』を大切に育てていきたい」とあいさつ。



苗木を手に「一本ずつ丁寧に植え（残雪を）二十二日付夕刊で紹介します」



「大きく育ってね」と、スコップで土を盛り、苗を植える子供たち

5千人の思い 苗木に

帯広の森 植樹祭

二十一日に開かれた帯広の森市民植樹祭には、市民約五千人が参加し、会場はにぎわった。あいにくの空だったが、子供も、お年寄りも、外国人も「大きく育って」と願いを一つに苗木を植えた。シラカバやトドマツと植樹林が造成する「帯広の森」を言葉通り市民の手で作ろうという計画で、今年は二十六回目。植樹の後には会場でバーベキューなどして盛り上がるなど、参加者はそれぞれの植樹祭を楽しんでいた。

（帯広報道部　内本　智子）

育ったら見に来る／亡き妻の分も

母国思い出す



植樹の後、バーベキューを囲んで談笑する外国人参加者ら

帯広西小五年の同級生、中山翔希さんと韓国留学生の美さんは妹の少年隊隊員として参加、苗木四本を植えた。「苗の周りを踏み固めるのが面白かった。大きく育ったら絶対、見に来たい」と声をそろえた。

しゃれたベレー帽に赤いセーター姿の河越哲司さんは八十一歳。市老人クラブ連合会メンバーで「後世に素晴らしいものを残したい」と、十年前から毎年参加している。七年前妻(故)を亡くし、今年は妻の分も植えた。

ハマド・サニー・ヤハヤさんはインドネシアの国費留学生で、砂漠緑化のため帰国後に用意し、植樹開始の一時間半前から植樹取りも。「普段から植樹をしているという今回は嬉しく八、二歳の子供の家族五人と、家族と過ごす時間をあまりとれないので、今日は「また」と福田政臣植樹祭実行委員長。

2000 年（平成 12 年）5 月 22 日
北海道新聞（夕刊）

間伐への参加いまひとつ

育樹取り組みに課題

十勝川から札内川まで帯広の市街地を緑のベルトで囲むことを目指した「帯広の森」・一九七五億円から始まった植樹祭には延べ十二万人を超える市民らが参加、これまでに約一千一万・六万に、市民参加で百年かけて、みるとの森を作る（市公園と花の課）ほどの夢事業。「レクリエーションの森」「自然の学校の森」など性格を八区画に分け、伐や枝打ちなどが必要で、「育成に対する市民の関心をいかに高めるかが課題となっている。

（帯広報道部　佐藤　宏光）

植樹祭（同四百三十一ha）、同緑育祭（同二百三十ha）、同緑育祭（同六十年まで）と合って植えられたところも出てきている。今きちんと間伐しておかないと、これまでの作業が無駄になる」と指摘している。

祭の参加人数が十万人を超えているのに比べ、育樹祭は一万人ほどで個人参加がほとんどない。育樹祭の対象は二十二haあるとみられるが、市公園と花の課は「参加人数が伸びず、間伐作業が追いついていない面はある」と説明する。

「エゾリスの会」などの市民団体が一昨年から間伐作業に乗り出す例も出てきている。ある団体の関係者は「樹木同士の距離が近すぎるため、枝が複雑に絡み合って植えられないところも出てきている。今きちんと間伐しておかないと、これまでの作業が無駄になる」と指摘している。

2000 年（平成 12 年）5 月 21 日
十勝毎日新聞

十勝産の丸太と〝格闘〟

優雅な音色を夢見て

アルプホルン ワークショップ



帯広の森で開かれたアルプホルン作りのワークショップ

【社会部＝成田融】一本の樹木がそのままのサイズで楽器になるスイス生まれの木製楽器「アルプホルン」を十勝の山林から切り出した木を使って作るワークショップ（アルプホルンを十勝に呼ぶ実行委員会主催）が、二十二日午前十時から帯広の森で行われた。楽器作りとはいえ、相手は切り出したばかりの丸太。肌寒い天候だったが、参加者たちは汗だくになりながら丸太と〝格闘〟した。

アルプホルンは全長三㍍を超える大型の木管楽器。音色を調整するため、根元が曲がっている木が適しているという。まっすぐな木は加工用として価値が低く、間伐材となってしまうことが多い。ラッパの部分が曲がっている木は加工用として価値が低く、間伐材となってしまうことが多い。

神奈川県厚木市の自然環境保全センター研究員中川重年さんが、アルプホルンをよみがえらせることを提唱。最近ではアルプホルンクラブを設立し、全国各地でホルン作りのワークショップやスイス音楽の演奏会を開いている。

この日のワークショップには林業実行委員長が会うちを使って中心部をくり抜いていった。

「自然の中から文化をつくり出し、世界と交流する第一歩」と話した中川さんが「造られていたものに息を吹き込もうではありません。チェーンにしている。

ンソーを使って丸太を三等分に切り分け、さらに縦に半分に切ってから、のみとで中心部をくり抜いていった。

この日だけの作業では完成しなかったが、年内に数回のワークショップを継続して開き、完成させるとと参加者たちはほほえみ、チェーンにしている。

植樹通じて友好を

緑の親善訪問団レセプション



植樹祭の成功を誓ったレセプション

【政経部＝池田有紀】帯広の森市民植樹祭（国実行委員会、市主催）に合わせ、帯広市と親交を深める姉妹都市を訪れている大分市からの「緑の親善訪問団」（団長・富田英雄助役）が二十四日、来帯した。同日午後六時から帯広市内のホテルで歓迎レセプションが開かれた。

一行は、公式訪問団十三人を含む二十八人。植樹祭に参加するのは今回で二十回目。レセプションには、帯広市側から約三十人が参加した。

冒頭挨拶から、帯広ブランドホルモンの贈呈があり、歓迎の乾杯。

初めに、鈴川敦文帯広市長が「植えた木の成長に合わせ、帯広市と大分市のきずながさらに強くなることを祈念している」と歓迎のあいさつ。訪問団を代表し、富田助役が「人と緑の触れ合いを通して、これからも一層の友好を図っていきたい」と述べた。山本日出夫帯広市議会議長、渕野文生大分市議会議長、山田実和帯広の森市民植樹祭実行委員会事務局長のあいさつの後、大分県訪問帯広観光協会会長の発声で乾杯した。

参加者たちは、十勝の食材を使った料理を味わいながら歓談。最後は新田朝一大分合同新聞社郎部長の万歳三唱で締めくくった。

2000 年（平成 12 年）10 月 15 日
十勝毎日新聞



青空の下〝森づくり〟に汗

晩秋のさわやかな青空の下で、森を育てようと、枝払いの作業に汗を流す子供たち（写真・金野和彦）

帯広の森市民育樹祭
千人が枝払いや間伐

【政経部＝岩谷真司】市民の手で森を育てようと「第十回帯広の森市民育樹祭」（実行委員会、帯広市主催）が十日午前十時から、市内南町南七線の帯広の森内で開かれた。晴れ上がった青空の下、三十四団体約八百人と個人参加約二百人が参加し、枝払いや間伐を行った。

今回の会場は、第二、三回市民植樹祭（一九七六、七七年）で植樹し、第二、二回市民育樹祭が開かれた区域。初めての二次間伐で、対象は約九千本に上る。

関係者で話し合いの上で選定、林業実行委員長があいさつ。植樹祭の作業を説明したのに続き、森の少年隊の刈谷夢子さん（明和小六年）が「もっともっと大きな緑に育てるため、育樹することを誓いますこと元気よく宣言した。

その後、参加者はそれぞれの指定区域に移動し、森の中に入りのこぎりを片手に間伐材の切り出しやドングリの植え付けなどを行った。また、会場内では拾った枝を使った動物オブジェ製作された。

帯広ライオンズクラブの下部団体レオクラブの活動と共に参加した池田野幼加

2001 年（平成 13 年）5 月 20 日
十勝毎日新聞



子供からお年寄りまで約5000人が参加。笑顔で植樹する家族連れ（20日午前10時半ごろ、川勝摩子撮影）

帯広の森の成長を願い

市民植樹祭

4800人が心地よい汗



今年も大分市から、緑の親善訪問団が参加。砂川市長（左から5番目）や松井団長（同6番目）らで記念植樹した（金野和彦撮影）

第二十七回帯広の森市民植樹祭（同実行委員会、帯広市共催）が二十日午前十時から、市内の帯広の森内で開かれた。朝は低い雲が空を覆っていたが、開会式の始まるころには晴天に恵まれた。四千八百二人（主催者発表）の市民が参加、森づくりの歩みに、新たなページを加えた。

一九九三年の開催以来、八しぶりに実行委員長と祭典長の二人が植樹

（19・19面に関連記事）

・五万七千二百本余りを植樹した。

砂川敏文市長が「帯広の森はまちづくりのシンボルとして末永く育てていくことが必要。森の成長に併せ、街も大きく発展させたい」とあいさつ。日本農業祭典長は、森は「帯広の森に緑豊かな私たちのふるさとの森」と植樹することを喜びました。

遺産を残すことになるのではないか、心を込めて植えてほしい」と述べた。

大分市緑の親善訪問団（団長・松井助役の招待に続き、森の少年隊歌員の山田麻衣さん（帯広小五年）が「二十一世紀に壮大に延べ十三万人余りが参加し、額に汗を光らせながら植えていった。

植樹祭は一九七五年にスタートし、前回までに

式典後、参加者は会場内の決められた区画に移動

（19・19面に関連記事）

2001 年（平成 13 年）5 月 20 日
十勝毎日新聞



五月晴れの下、スコップ片手に式典会場から植樹会場に移る参加者ら（20日午前10時半ごろ、川勝摩子撮影）

帯広の森 市民植樹祭

街を緑でいっぱいに

1本1本、優しく

5月晴れの下で笑顔

帯広の森市民植樹祭会場は、家族連れの笑顔が広がった。帯広では生憎、平年よりも二・六度高い二八・九度まで気温が上がり、さわやかな笑顔に恵まれた午前九時すぎから続々と詰め掛けた参加者は、汗をぬぐいながら、一本一本、苗木に植樹。その後は焼き肉を囲むなど、森の中での一日をたっぷり満喫した。

（岩谷真宏、金澤航）

自然に触れて大きくなって

親子で参加

Q：たくさんの人がいてびっくりしました。

子供たちには自然と触れ合いながら大きくなってほしい。一般参加の飯嶋洋子さんらは、小学生の息子二人と二時に初植樹。

（もとおか）香ばしいスナラの苗木を手に「これ何の木かなあ」と興味津々。同二年生の息子（よりあき）君も元気に負けず、植樹の鍬を一生懸命に踏み固めていた。

30人参加し40本植える

市議員会と議友会

Q：帯広市議会議員会（長谷部昭夫会長）と帯広市議会友会（山本甘出夫会長）は、市民植樹祭に先立ち同日午前八時半から、市内の森の交流館・十勝導入会館内にアカエゾマツなど四十本を植えた。合わせて三十人が参加した。植樹は、議員会が昨年初めて実施し、今年、議友会も加わった。今回が仕事の最終部



30人が参加しアカエゾマツなどを植えた議員会と議友会のメンバー

会長は「世紀をまたいでこうした試みをつないでくれた先輩に感謝したい」と語った。

連続で9回目最高に楽しい

西帯わかば会

Q：高齢者学級の西帯わかば会（三村敏憲会長）は今年で連続九回目の参加。会の設立当初の取り組みで、会員三十人がスコップを手に汗を流した。

「みんなで集まって、作業するのが楽しい」と三村会長。汗はほとんど隠せず、笑れる場子もコップを手に汗を流した。午後にはパークゴルフ場でプレーを楽しんだ。

どこの国も願いは一緒

管内在住外国人

Q：帯広市国際交流事業団（JICA）研修員など管内在住の外国人約百人は「世界の友達」のグループを作、森づくりに加わった。

イランからのJICA研修員、サマタさん（一）は「イランでも三月に国民みんなで木を植えるという運動がある。どこの国で植えても、植樹にかける願いは一緒」と、

街の花屋さん

思いを込めながら苗木を植えていた。

2001 年（平成 13 年）5 月 20 日
十勝毎日新聞

大分市から今年も参加

市民植樹祭 歓迎レセプション開く



大分市緑の親善訪問団を迎えての歓迎レセプション

帯広市の姉妹都市、大分市からの緑の親善訪問団（団長・松井農人助役）一行四十二人が十一日、千四百本余りを植えている。

砂川敏文帯広市長が「植樹祭に参加していただけることに感謝した。帯広の森の成長とともに、両市の親善がますます確固たるものになるよう願っている」と歓迎の言葉を述べた。松井団長は「帯広の森が掲げる百年の計は、親子孫三代にわたる壮大なプロジェクト。参加できることは光栄で、楽しみにしている」とあいさつした。

山本甘出夫前市議会議長、秦野恭義大分市議会議長、高橋建文植樹祭実行委員長が歓迎を述べた。帯広親善協会の大浪貴明会長の音頭で乾杯し、森の育ち具合などを話題に歓談した。

同市で記念写真を撮り、最後に大分合同新聞の平山郁夫顧問部長が万歳した。

（岩谷真宏）

2001 年（平成 13 年）5 月 21 日
北海道新聞



第二十七回帯広の森市民植樹祭が二十日、帯広市西二三南五の会場で行われた。大分市から来た苗木の成長を祈って植樹する参加者

苗木の成長見守ろう

帯広の森市民植樹祭に4800人

大分市の訪問団も参加

「緑の親善訪問団」を含め市民ら約四千八百人が参加し、三・五ヘクタールに約五千二百本を植えた。

植樹祭は一九七五年度からスタートし、昨年度までに延べ十三万五百人が参加。一二五・九ヘクタールに植樹し、二十一万七百本を植えている。

今年植樹したのはカシワ、ミズナラ、ハルニレなど十四種の苗木。開会式では砂川敏文市長があいさつ。森の少年団の山田麻衣さん（帯広・光南小五年）が「立派な森ができることを願って植樹します」と宣言した。

参加者たちは、家族や職場の仲間同士でスコップを振るい、一本ずつ丁寧に植えていた。



青空の下で多くの市民が参加し間伐や下枝払いに精を出した育樹祭（21日午前11時ごろ、川崎智子撮影）

大きく育て 願い込め

第11回帯広の森市民育樹祭

間伐や下枝払い 860人が心地よい汗

第11回帯広の森市民育樹祭（実行委員会、帯広市主催）が21日午前10時から、帯広の森で開かれた。秋晴れの下、32団体と個人参加計860人が、森の成長を願い、下枝払いなど作業に汗を流した。

今回は、第1、18回帯広の森市民植樹祭（1991年、92年）会場となった約3ヘクタールの約1万2000本が対象。初めに砂川敏文市長が「仲間との交流も兼ねながら作業し、秋の一日を楽しんでほしい」、林光繁実行委員長が「市民の手で11回積み上げたのは貴重なこと。来年は全国緑化林も市内で開かれる」とあいさつした。

作業説明の後、森の少年隊の小林千恵子さん（稲田小6年）が「自然の大切さを学ぶ大事な森になった。もっともっと大きな森となるよう育樹することを誓う」と元気に育樹宣言した。参加者は、日々成長していく森の中をにぎやかに育樹会場まで移動。持参したノコギリなどを使って間伐したほか、ドングリを植え付けた。

帯広大谷短期大学生で作る奉仕団体「えんじゅ（楡）ソサエティ」（齋藤節子代表）のメンバー4人は、今回が初参加。齋藤代表は「植えたときには小さかった木が、大きく育っているのに驚いた。こうした経験は色々と勉強になる」と話した。

（岩谷真宗）

2001 年（平成 13 年）10 月 21 日
十勝毎日新聞



ノコギリを使い、下枝払いに精を出す小学生

もっと大きな森になあれ！

帯広で市民育樹祭

第十一回帯広の森市民育樹祭（帯広市、同実行委主催）が二十一日、帯広の森で開かれ、爽やかな青空の下、参加した市民が下枝払いや間伐作業を通じて、晩秋の一日を満喫した。

一九七五年から続けている市民植樹祭でできた森の手入れを通じ、市民に健全な森づくりを考えてもらおうと毎年開いている。今年は一九九一、九二年に植樹した約一万二千本が対象で、町内会や企業など三十三団体と個人約八百人が参加した。

作業は市内の小学生でつくる「森の少年隊」の小林千恵子さん（稲田小六年）が「もっともっと大きな森にすることを誓います」と育樹宣言して始まった。参加者は歓声からのどく秋のやわらかな日差しを浴びながら、ノコギリでヒドマツやカシワなどの下枝を切ったり、育ちの悪い木を間伐したり、また、合間にどんぐりを植えたりして、心地よい汗を流していた。

明和小六年の柳谷真樹君は「ぼくらの手入れで少しでも大きくなるとうれしい」と、木の成長に願いを込め、懸命にノコギリを動かしていた。

2001 年（平成 13 年）10 月 22 日
北海道新聞

力合わせ森づくり

帯広　市民植樹祭に4千300人

第二八回帯広の森市民植樹祭（実行委員会主催）が十九日、帯広市西二五南六の会場で開かれた。小雨の降る中、姉妹都市である大分市の「緑の親善訪問団」や帯広市民約四千五百人が、四ヘクタールの土地に約四千三百本の苗木を植えた。

植樹したのはカシワやミズナラ、ハルニレなど十種。一九七五年度に始まった植樹祭は、これまでに延べ十三万五千人が参加者は家族や仲間たちと一緒に苗木を植えていた。



苗木を植える植樹祭の参加者たち

2002年（平成14年）5月20日
北海道新聞

第28回帯広の森市民植樹祭

第28回帯広の森市民植樹祭は、雨が降り正午でも気温は11．3度（平年16．3度）と肌寒さを感じる天候だったが、受付付け開始の午前8時半から老若男女、多くの市民が続々と詰め掛けた。植樹や、ひと仕事終えた後の食事を楽しむ声が、帯広の森のあちこちに響いた。（岩谷真宏、広田実）

今年も緑を市民の手で



小雨が降る中、カッパ姿で植樹会場に移動する参加者たち（19日午前10時半ごろ、川崎雄子撮影）

親子で自然に触れ合い

幕明町内子供会

○…今回が3回目の参加となる「幕明町内会子供会」は、幕小の児童12人と父母が、力を合わせて24本を植樹。「子供たちが自然について考えるいい機会」と役員の野口美津江さん（38）。同小4年の加藤聡子ちゃんは土の中から出てきた幼虫に興味津々。「大きくなったら何になるんだろう」と大事そうに抱き締めていた。

共同作業で団結強まる

青年リーダーの会

○…帯広有志約30人で組織する青年リーダーの会（本由真理子会長）は男女9人で参加。横本健司さん（22）は「森づくりという共同作業に参加でき、とてもうれしい。空気もおいしくて気分は上々」と笑顔。本由会長は「共同作業を通して仲間の団結も強まります」と話していた。

12人の仲間で わいわい楽しく

メンテック社員

○…緑化会社メンテックの若手社員で構成する「メンテックグリーングループ」は、10年ぶりに参加。メンバーの奥田亮孝さん（26）は植樹会場に向かう途中、「以前植えた場所がすてきな森になっていた」とニッコリ。12人の仲間たちとスコップを握るい「作業の後、みんなでわいわいやるのが楽しい」と、森の中での休日を満喫していた。

高さ3㍍の桜の木10本を

広帯広市議会議員、植樹会を開催した帯広会長、山本会長は、議長、市議友会、王国十勝にとっては喜ばの時。木々も大きく育つ長は植樹祭に先だち午前8時半ごろから森の交流館で、個別の共同作業を通して仲間の団結も強まります」と話していた。

○…帯広市市議会議員、参議会議長と帯広市議友会、王国十勝にとっては喜ばの時。木々も大きく育つ長は植樹祭に先だち午前8時半ごろから森の交流館で、個別の共同作業を通して仲間の団結も強まります」と話していた。

2002年（平成14年）5月19日
十勝毎日新聞

植樹祭で友好深めよう

大分市から親善訪問団　歓迎レセプション



料理を囲んで懇親した歓迎レセプション

帯広の森市民植樹祭に参加するため18日に来帯した、大分市緑の親善訪問団（団長・御簾眞知夫助役、22人）の歓迎レセプションが、同日午後6時半から帯広グランドホテルで開かれた。

大分市は、帯広市の姉妹都市で、市民、議会、行政レベルでの交流が盛ん。植樹祭には毎年参加しているという。この日は、約50人が参加。砂川敏文市長、山本日出夫市議会議長、高橋紘文植樹祭実行委員長ら「一緒に木を植えて、両市の友好のきずなをいっそう深めましょう」などとあいさつをした。

訪問団からは、御簾眞知夫助役が「雄大な森の中で、帯広市民と共に植樹できることをうれしく思う」と述べ、「全国都市緑化おおいたフェア（2003年開催）への帯広市の参加を要請するとともに、平松守彦大分県知事の親書を砂川市長に手渡した。

大分県知事の親書を砂川市長に手渡した。

大賀良興帯広観光コンベンション協会長の乾杯で懇親会に移り、参加者は、農畜産物をたっぷり使った料理に舌鼓を打った。両市で記念品を交換したほか、両市のキャンペーンレディーが帯広、大分のPRをした。（岩谷真宏）

雨にも負けず森づくり

帯広の森植樹祭　4千750人が参加

第28回帯広の森市民植樹祭（実行委員会主催）が19日午前10時から、市内の帯広の森で開かれた。朝から降り出した雨は植樹を始めるころに小降りになり、職場や地域の仲間、家族連れなど4千500人、個人250人（主催者発表）が参加。約4千の会場にカシワやミズナラ、ハルニレ、オニグルミなど約4300本を植える作業に汗を流した。

（2、21面に関連記事）



今年も多くの市民が参加して帯広の森づくりに汗を流した植樹祭（19日午前11時ごろ、川崎雄子撮影）



大分市緑の親善訪問団らと記念植樹した砂川市長（左から2人目）ら（19日午前10時45分ごろ）

岡田正午前10時からの式典は、三浦きみえ実長＝帯広を緑と花で美しくする運動実行委員会長＝の発声で開会。砂川敏文市長は「リスやが生息し市民の楽しめる森になって来た。全国に誇れる帯広のまちづくりとして、今後も協力をお願いしたい」、高橋紘文実行委員長は「最初の植樹部分は疎になってきている。必要な手入れで100年後を考えながら植えてほしい」とあいさつした。

帯広市の姉妹都市大分市から参加した「緑の親善訪問団」の御簾眞知夫団長（大分市教育長）が、来賓を代表して祝辞。森の少年隊の大石愛里さん（稲田小5年）が、21世紀中に立派になるようにの誓いをする。

宣言「植樹に移った。参加者たちは、約15分かけて式典会場から植樹する通称「ポプラ通り」を通りながら移動。それぞれ決められた区画に散らばり、苗木を手に作業に汗を流した。終了後、子供たちほか大人たちは豚肉などを焼いて昼食を楽しんだ。（岩谷真宏）

2002年（平成14年）5月19日
十勝毎日新聞

森の利活用を探る

あすから全国雑木林会議

市民団体や自治体関係者 全国の150人参加

同会議は1993年に始まり、道内開催は初めて。今回は全国から約150人が参加する予定。

1日目は、3コースに分かれて森を視察。「十勝千年の森」では衣食住・遊の実践を、幕別町の「体感の森」では間伐など育林活動を体験、鹿追町の然別湖周辺では雄大な原生林を散策する。

2日目は、午前中に参加者全員で帯広の森を訪れ、心を和ますミュージックセラピーを体験。その後場所をとかちプラザに移し、「開拓と森とアイヌ文化」など5つの分科会を実施する。3日目は、とかちプラザで帯広の森の間伐材を利用し、子供も楽しめる木工体験を行う。

22日の分科会は、市民の当日参加を受け付ける。資料代として200円を持参し、午前11時から午後1時までの間にとかちプラザ1階アトリウムで申し込む。

（池谷智仁）

"森と人のかかわり"について意見を交換する「第10回2002年全国雑木林会議とかち大会」（実行委員会主催）が21日から23日までの3日間、帯広市内のとかちプラザなど十勝管内で開催される。森をフィールドに活動している市民団体や自治体関係者が全国から集まり、清水町の十勝千年の森などの視察を通し、森や里山の利活用方法を探る。

第10回 2002全国雑木林会議 とかち大会 分科会日程

9月22日(日) 14:30～17:30 とかちプラザ

第1分科会	開拓と森とアイヌ文化	講習室403
第2分科会	「森のこころ」から現代社会を眺めると…森、再発見	研修室306
第3分科会	癒しのフィールドとしての森・緑の可能性	講習室401
第4分科会	エネルギーの地産地消「木質バイオマスを考える」	講習室402
第5分科会	新しい東アジア森林文化交流	研修室307

2002年（平成14年）9月20日
十勝毎日新聞

十勝の森を散策、体感

全国雑木林会議が開幕

森の利活用について意見を交換する「第10回2002年全国雑木林会議とかち大会」（実行委員会主催）が21日、開幕した。全国から集まった約150人の参加者は3コースに分かれ、鹿追町の然別湖周辺の原生林や幕別町の「体感の森」など、異なる性格を持つ森を体験した。

午前11時に清水町の「十勝千年の森」に到着した30人は、十勝晴れの下、ミズナラやハルニレなどの広葉樹が生い茂る道を散策。約200㌶ある森の3分の1を占めるカラマツ林を人の手で広葉樹林に戻す活動を、参加者は興味深く観察した。また、散策時に集めた赤く色づいたヤマザクラなどの葉を布の上からたたいて染めるハンカチや、ドラム缶でピザを焼いて作るなど、森の素材を使った遊びを満喫した。

22日午後からは、帯広市内のとかちプラザで分科会などを行う。市民の当日参加も受け付ける。

（池谷智仁）



ミズナラなどの広葉樹に囲まれた道を散策する参加者たち
（21日正午、清水町十勝千年の森。折原徹也撮影）

2002年（平成14年）9月21日
十勝毎日新聞

帯広の森で音楽療法実践

「全国雑木林会議」2日目

清涼な音色、心和む参加者

5分科会でも論議深める

「第10回2002年全国雑木林会議とかち大会」（実行委員会主催）は21日の十勝の森体験に続いて、22日午前11時から、帯広の森でミュージックセラピー（音楽療法）を実践した。緑あふれる森の香りを感じながら、清涼な音色が参加者たちの心を和ませた。（池谷智仁）



帯広の森に心和ます音色が響いたミュージックセラピー（22日午前11時10分ごろ）

神奈川を中心に活動する「玉川レントラーカペレ」の4人が演奏。アルプホルンやクラリネット、アコーディオンを使い、スイスを中心とした民族音楽を奏でた。木漏れ日の中、軽快に、時にゆったりとした音楽が、周囲に広がるキハダやエンジュの森に響いた。

午後からは、市内のとかちプラザで「癒（いや）しのフィールドとしての森・緑の可能性」など、5つの分科会を開催した。

21日の森体験では鹿追町の然別湖周辺、幕別町の「体感の森」、清水町の「十勝千年の森」の3コースに分かれて行われ、参加者は秋の気配を感じさせる十勝の森を満喫。

このうち、「十勝千年の森」コースに山口県から参加した広林恵太郎さん（29）は、ピザ作りなど、さまざまな体験ができて良かった。山口では山頂部に生えているミズナラなどが、十勝では平野にあるので驚いた」と感想を語った。

各コースとも雑木林会議では〝恒例〟という、「朝まで生討論会」を開き、森や里山と人のかかわりについて時間を忘れて議論した。

2002年（平成14年）9月22日
十勝毎日新聞

2002年（平成14年）9月23日
十勝毎日新聞

「自然と人の関係 対等に」

全国雑木林会議とかち大会 活用法など論議



森と人のかかわりについて論議を深めた分科会

「第10回2002年全国雑木林会議とかち大会」（実行委員会主催）は22日午後、帯広市内のとかちプラザで5つの分科会を実施した。約150人の参加者が、森と人のかかわりについて議論を重ね、それぞれの地域に合った利活用方法を模索した。また、最終日の23日は同プラザで森の工作体験などを行った。（池谷智仁）

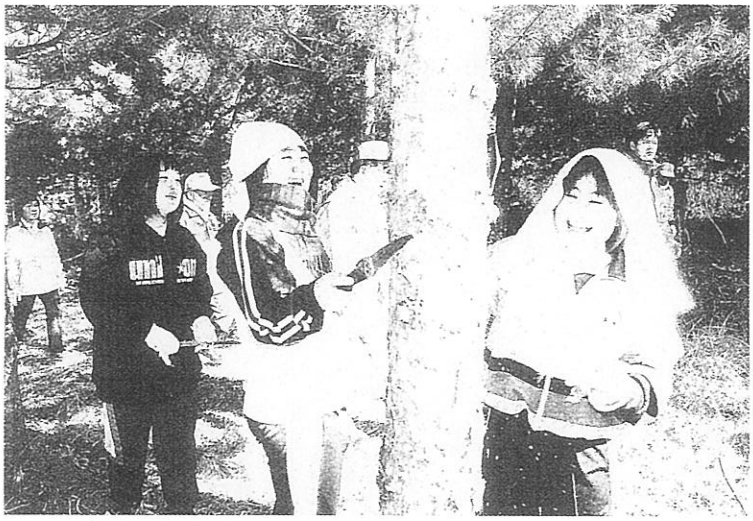
「関拓と森とアイヌ文化」の分科会では、北海道独自の文化と森のかかわりが話し合われた。帯広百年記念館の内田祐一学芸員が「アイヌの人々は自然に対し必要以上に手をかけず、共存した社会を築いていた」と説明。「管理ではなく、自然と人が対等な立場になれば、自然に対するアプローチ方法が増えるのでは」と提案した。

「木質バイオマスを考える」では、間伐で発生した素材などをエネルギーとして利用する際の課題などコストがかかる」と指摘されたが、「林業の振興につながり、地域産出の資源になる」「再生可能なエネルギー」などが利点として挙げられた。参加者からは「取り組みを進め、実績を作ろう」という声が上がった。

そのほかの分科会では「医療や美術などの創作の場として、森林空間の利用を促進させるべきだ」などの意見が出た。

分科会に先立ち全体会が行われ、林光繁大会長が「この大会が、自然環境や地域文化を大切にし、心豊かな国造りの前進につながってほしい」とあいさつ。砂川敏文市長が参加者へ歓迎の言葉を贈った。

2002 年（平成 14 年）10 月 20 日
十勝毎日新聞



木漏れ日の中、森の成長を願い間伐を行う参加者たち（20日午前11時、金野和彦撮影）

秋晴れの下で千人森づくり

帯広の森市民育樹祭

「第12回帯広の森市民育樹祭」（同実行委員会、帯広市主催）が20日午前10時から、帯広の森で行われた。好天に恵まれ、森の成長を願う31団体と個人合わせて約1000人が、間伐や下枝払いなどの森づくりに汗を流した。

今回は、1987・88年に「帯広の森」の植樹祭を行った地区（約8ヘクタール）で、カシワやヤチダモなど1万6000本を対象に実施。

砂川敏文市長は「これからも市民の力を借りながら、人と共生する森づくりを進めたい」とあいさつした。

実行委員長は、憩いの場だけではなく、今後森をどう利用していくのかを考えながら作業してほしいと呼びかけた。

作業手順と注意点が説明された後、森の少年隊の井坂美南さん＝帯広西小6年＝が「自然の大切さを学べる大事な森をもっと大きく育てるために育樹します」と宣言した。

参加者はノコギリなどを使い、樹木の成長を妨げている枝を払い落とし、開けた場所にドングリを植えた。青少年育成のために組織された帯広レオクラブの奥山佳奈美会長（16）＝帯広六中3年＝は「力が必要で大変だった。森を育てるのは簡単でないが、これからも森づくりにかかわっていきたい」と初めての間伐の感想を話していた。

2003 年（平成 15 年）5 月 19 日
北海道新聞



約４千人が参加、和気あいあいと苗木を植えた帯広の森市民植樹祭

４千人が笑顔
帯広で植樹祭

足寄でも

第二十九回帯広の森市民植樹祭（実行委など主催）が十八日、市内西二二五十本の苗木を植えた。

一南六の「帯広の森」で行われた。帯広と姉妹都市である大分市の「緑の親善訪問団」ニ十五人を含む市民ら約四千人が、四万に四千二百本の苗木を植えた。

この日はカシワ、ミズナラなど十種の苗木を、参加者は数人ずつ協力し合いながら植え込み、丁寧に土をかぶせた。初参加した国際協力事業団（JICA）研修生のロラ・アンバリタさん（フィリピン出身）は「今度来日した時の木の成長ぶりが楽しみ」と話していた。

一方、足寄町でもこの日、町緑のまちづくり協議会（大川勇会長、三十三団体）主催の植樹祭が町内里見が丘で行われ、関係者ら八十人余りが参加。ハスカップや北米原産のアロニアなど五種類の広葉樹計五十本の苗木を植えた。参加者はキノコの菌を苗木に埋め込む「駒打ち」に挑戦したほか、「緑が美しい町の出会いの森」で森林浴も楽しんだ。



4千人 森づくりに汗

帯広の森で市民植樹祭

「第29回帯広の森市民植樹祭（同実行委、市主催）が18日午前10時から、帯広の森で開かれた。緑豊かな町づくりの原点となった「25団体3800人と個人200人、合わせて4000人が参加。カシワやミズナラ、アカエゾマツなど約4500本の苗木を植え、未来の地球を託した。

午前10時からの式典は、緑興会の佐々木晃輝・帯広の緑の環境広場推進委員会会長、来賓の砂川敏文市長が「帯広のまちづくり、人づくりの象徴的存在が帯広の森づくり。今後も市民の協力を得ながら、未永く続けていきたい」、高橋紘文実行委員長は「10年、20年先の森の姿に思いをはせながら、1本1本大切に植えてほしい」とあいさつした。

来賓を代表して、姉妹都市の大分市から参加した緑の親善訪問団長、釘宮磐大分市長が祝辞を述べた。森の少年隊の福原健太郎君（緑丘小5年）が「帯広の森は青年期を迎え、育てる森に変わってきた。21世紀中に緑のふるさとができることを願い植樹します」と高らかに宣言した。

参加者たちは式典会場から植樹会場に移動し、スコップなどを手に植樹作業に汗を流した。終了後は仲間たちとバーベキューを囲んで作業の疲れを取り、子供たちは帯広の森の間伐材を使用した木の工作に夢中になっていた。（池谷智仁）

2003 年（平成 15 年）5 月 18 日
十勝毎日新聞

2003年（平成15年）5月18日
十勝毎日新聞

緑への願い込め

第29回帯広の森市民植樹祭

第29回帯広の森市民植樹祭の会場には、午前9時すぎから、家族連れらが続々と詰め掛けた。気温は正午現在、平年より7.5度低い8.7度で肌寒い曇り空。姉妹都市の大分市緑の親善訪問団（団長・釘宮磐大分市長）を含む参加者は、苗木1本1本を丹念に植えた。植樹後は焼き肉を囲む姿もみられ、森の中での休日を存分に楽しんだ。（池谷智仁、栗田直樹）



植樹する砂川敏文帯広市長（右から6人目）、鈴木孝昌同市議会議長（同5人目）、高橋猛文実行委員長（左端）、野原一登同副議長（左から2人目）と釘宮大分市長（右から7人目）、河越康秀同市議会議長（同4人目）ら緑の親善訪問団員（18日午前10時半ごろ、金野和彦撮影）

懸命に土掘り 元気な歓声 響く

帯西幼稚園の親子

○…「いっぱいほれたよ」―。子供たちの元気な歓声が響くのは帯西幼稚園の親子約90人。小さなスコップで一生懸命に土を掘る子供の姿に、親たちは目を細めていた。親子で参加した西島可恋ちゃん（5）は「ぐっ、ぐっ」とスコップが入っていった」と笑顔。父征宏さん（43）は「どっちが大きくなるか競争だ」と話していた。

20人が偲れた 手つきで30本

「昭九会」

○…1934年（昭和9年）生まれでつくる「昭九会」（河瀬勝郎会長）の会員約20人は慣れた手つきで苗木30本を植え終えた。第1回から連続参加の緑郎部会長の林中久信さん（68）は「初めて植えた木も大きくなったぎょうに幸せも大きくなってほしい」との願いから帯広に与えるよう寄って植えた木も孫、ひ孫の代まで「おいしい空気と水を帯広に与えるよう寄ってほしい」と話っていた。

一足早く〝共同作業〟

結婚予定のカップル

○…個人参加の藤木駿士老親愛子供の姿に、親たちは目を細めていた。親年長の西島可恋ちゃん（5）は「ぐっ、ぐっ」とスコップが入っていった」と笑顔。父征宏さん（43）は「どっちが大きくなるか競争だ」と話していた。

20人が偲れた 手つきで30本

「昭九会」

○…1934年（昭和9年）生まれでつくる「昭九会」（河瀬勝郎会長）の会員約20人は慣れた手つきで苗木30本を植え終えた。第1回から連続参加の緑郎部会長の林中久信さん（68）は「初めて植えた木も大きくなったぎょうに幸せも大きくなってほしい」との願いから帯広に与えるよう寄って植えた木も孫、ひ孫の代まで「おいしい空気と水を帯広に与えるよう寄ってほしい」と話っていた。

「癒やしの場」の可能性探る

道内から60人参加 とかち森づくりシンポ

森林療法など関心集める

帯広の森で作業療法を体験する参加者たち（20日）



癒やしの場としての森の可能性を探る「とかち森づくりシンポジウム」（実行委員会主催）が20、21の2日間、帯広市内で開かれた。森林療法や講演などを通して、森が持つ多様な効果について理解を深めた。（池谷智仁）

昨年、十勝管内で実施した「全国雑木林会議とかち大会」の成果を引き継ぐため、同大会の関係者が企画。道内から約60人が参加した。

20日午後1時からは、帯広の森でカウンセリングと作業療法を実践。参加者は造成から約30年が経過したヤチダモやカラマツなどの森に入り、好きな場所を探して散策した。2人1組になって互いの話を聞いたり、自分自身と向き合ったりしながら、ゆったりとした時間を過ごした。また4つのグループに分かれ、間伐や園路整備などの作業も体験した。

森を舞台に活動している上川管内下川町の三浦千明さん（27）は「森林療法に興味があった。今回の体験を生かして将来的にカウンセリングもやってみたい」と話していた。

21日は、午前9時から道森林管理局帯広分局で基調講演を開催。森林療法研究家の上原巌東海女子大専任講師が国内外の森林療法を紹介、「多様な樹種がある帯広は森林療法に向いている。医療や福祉分野に取り込むことで森を活用した健康づくりも期待できる」と述べていた。引き続きパネルディスカッションを行い、森の可能性を探った。

いのうえ歯科医院
帯広市西3南25 ☎25-6480

2003年（平成15年）9月20日
十勝毎日新聞

元気に育て850人が汗

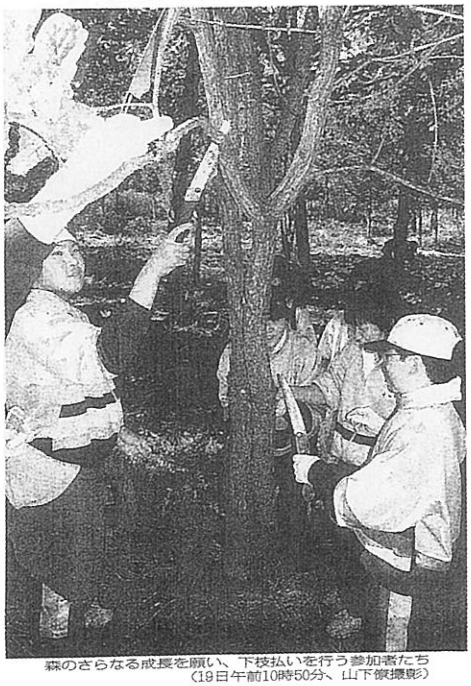
帯広の森で市民育樹祭

第13回帯広の森市民育樹祭（同実行委員会、市主催）が18日午前10時から帯広の森で開かれた。晴れ渡る秋空の下、健全な森育成の願いを込めて、33団体と個人合わせ約850人の市民が間伐作業などに汗を流した。

今回は1990年に帯広の森市民植樹祭を実施した地区（約4ha）で、カシワやアカエゾマツなど約7900本が対象。砂川敏文市長が「森を一緒に育てることは街や人を育てることにつながる。植樹した人の思いを考えながら育樹してほしい」と宣言し、作業を開始した。

林光業実行委員長は「木は温暖化を防ぎ食料増産にも貢献する。この運動を広げることで食料基地・十勝の繁栄につながる」とあいさつ。森の少年隊の馬渕希実さん（大正小5年）は「大変だったけど楽しい。木が倒れた瞬間はすっきりした」と作業に熱中していた。

樹木の成長を促すため、参加者はノコギリなどを巧みに使って競合する木の間引きや下枝払いを行い、開けた場所にドングリを植えた。父親の宮田雅人さんと協力して直径10cmほどの木を根元から切った宮田拓君（緑丘小5年）は「大変だったけど楽しい。木が倒れた瞬間はすっきりした」と作業に熱中していた。（池谷智仁）



森のさらなる成長を願い、下枝払いを行う参加者たち
（18日午前10時50分、山下俊撮影）

2003年（平成15年）10月19日
十勝毎日新聞

帯広の森
30周年

植樹祭は今年で終了

利活用方法を検討へ

帯広市のまちづくりのシンボル「帯広の森」造成開始から2004年度で30年を迎え、5000人規模の市民が集まり祭典方式で実施してきた市民植樹祭は終了する。これまで延べ14万4000人が参加し、約22万500本を植樹。帯広の森市民植樹祭実行委員会（高橋博文委員長）は、「100年の大計」として1973年に都市計画決定された帯広の森構想。現在の計画面積は4506.5haで、市民植樹祭は75年から開始した。市民植樹祭はこれまでの29回で、1万7400haにアカエゾマツやカシワなど針葉広葉樹54種類を植えた。30回目を迎える04年度は、5月16日に西25南5の約5.5haで開催。森づくりを継続・発展させるため、森の少年隊が初めて祭典長を務める。

市民植樹祭に適した大規模な植樹場所が限られてきたことから、現形態での開催は終了するが、同実行委はあくまで「通過点」ととらえ、帯広の森区域内に合計30haほどある空き地で市民植樹を継続していく方針。実施形態、学校や町内会単位など）や実行委組織の見直しを含め、05年度以降の取り組み方法を模索する。

今後の植樹活動や利活用の参考にするため、04年度市民植樹祭参加者を対象に、帯広の森利用状況や森の魅力などのアンケートを実施。森の育成確認、調査委員長は今までの形態は最後になり、達成感や充実感、寂しさがある。しかし植樹が終わったわけではなく、シンポジウムなどを通して今後の方向性を検討したい」と話した。（池谷道仁）

2004年（平成16年）3月23日
十勝毎日新聞

市民植樹祭と私（上）

畳に額すりつけ反対派を説得



元帯広市長
田本憲吾さん（74）

【略歴】1929年、樺太生まれ。53年、日本大学理工学部卒。55年、家業の「田本食堂」（帯広）を継いだ。市都市計画委員などを歴任、74年から90年まで4期16年間市長を務めた。植樹祭の実行委員会を立ち上げ75年、第1回を開いた。2001年の第27回植樹祭では祭典長を務めた。

帯広の森との出合いは、帯広市都市計画委員だった1970年ごろにさかのぼる。ある晩、吉村博元市長が故人宅に招かれた。オーストリアのウイーンを視察した吉村さんは、アルプスの森に囲まれた都市に感激していた。「緑の中にまちをつろう」で意見が一致した。

予算案の可決わずか1票差

1883年に設立された帯広の森は、帯広市都市計画委員会。吉村市長は帯広の森実現に必要な補正予算案を提案した。「なぜ万里の長城のような森をつくるのか」「（市街地とほかの地域とを）区別するのか」「市には土地を買うだけの財政力がない」などの反対意見が出た。予算案は1票差で可決した。

1973年12月の市議会で通過させた。

別の苦労もあった。74年度、市は北海道開発庁（当時）から緑用地買収費の補助金約4億円を受け取ることになっていた。事業費総額は補助金の3倍程度との条件があった。12億円余りを用地買収に投じればほかの事業ができなくなる。市長就任後、開発庁へ約3億円を返しに行った。専門官にテーブルをたたいて怒られた。用地買収に際し破り市長に就任した。「森づくりをやめれば、僕のまちづくり理念がなくなる」。畳に額をすりつけ反対派市議を説得、6月議会で関連予算案を通過させた。

補助金返還や買収に反発も

74年4月、私は吉村市長の後継候補を選挙戦で破り市長に就任した。「森づくりをやめれば、僕のまちづくり理念がなくなる」。畳に額をすりつけ反対派市議を説得、6月議会で関連予算案を



第1回市民植樹祭には故・吉村博氏（手前左）、田本憲吾氏（吉村氏の右隣）の新旧両市長が参加した＝帯広の森20年記念誌より

75年6月1日、第1回植樹祭開催にこぎつけた。森は図面の上でなく実際に木を植え育てることで親しみ入る。市民が1人でも2人でもまちづくりに参加する芽生えがでた喜んだ。

30年間を通し、多くの市民が植樹に参加したのは木を植えるためだけでなく、自分たちのまちをつくろうとの意識からだと思う。

植樹祭が終わることは寂しい。用地買収は計画の九十数㌫まで進み、植えた木々も大きく育ってきた。まちがあり、人間が生きる限り「ジン・エンド」はあり得ない。森は100年、200年間、市民と共に生き続ける。市民のエネルギー、行動、活動が30年間続いてきた。培ったエネルギーをどうやって新たな創造に生かせるか。まちづくりの大局を描く時にきている。（深田隆敏）

◇　◇　◇

「帯広の森市民植樹祭」（実行委員会、帯広市主催）が16日開かれ、30年の歴史に幕をおろす。これまで延べ14万4000人が約22万5000本を植えた。植樹祭にゆかりの深い3人に森への思いを聞いた。

2004年（平成16年）5月12日
十勝毎日新聞

2004年（平成16年）5月13日
十勝毎日新聞

市民植樹祭と私〈下〉

普段着感覚で帯広の森実感を



植樹祭実行委員長
高橋猛文さん(54)

【略歴】1949年、帯広生まれ。73年高千穂商科大卒業後、高橋加工部入社。2003年から同社社長。「森の少年隊」に77年の設立からかかわる。89年から同隊の指導委員長、2001年から3代目の植樹祭実行委員長を務める。

植樹祭が始まる前の「帯広の森」一帯は、畑が広がる平凡な農村風景そのものだった。友人に誘われ第1回の植樹祭（1975年）に参加したが、吉村博元市長（故人）が打ち出した計画があまりにも壮大すぎて、森になることを想像できなかった。

30年たった今では、10万7・4ヘクタールに233万本の木が植えられ、市民1人当たりの緑地面積は全国トップクラスを誇る。

現在私が指導委員長を務める「森の少年隊」は、隊員58人で発足した。当時私はロータリークラブのつながりで指導員に。小学5、6年生が隊員で、10月に帯広の森に入ることと自体、とかく自然を壊す行為につながりやすいからだ。私自身も「子供たちの手によるものなので、苗木の1本1本に子供たちの思いが宿っている。

森づくりは
まちづくり

森のドングリを拾い、苗木で育てた苗木が植樹祭で植えられてきた。森の中学生から社会人の指導員計42人のうち9割が隊員経験者。2、3年前から隊員OBの子供が入隊し始め、感慨もひとしおだ。帯広の森はまさに自然の「学校」。森づくりはまちづくり、そして人づくりでもあることを改めて感じる。

森林療法や
芸術活動も

まとまった土地を確保できず植樹祭は今年で終わるが、30ヘクタールが残っている。今後は子供たちを中心に学校単位などでの植樹を考えていきたい。

植樹から育樹へ森づくりが移っていき、森をどう利活用していくかが今後の課題。自然観察はもちろん、憩やしの効果がある森林療法や芸術活動など市民に森を利用してもらうための体制づくりなどを進めていく。

よく帯広の森を散策するきっかけに、普段着の感覚で帯広の森を利用してほしいと思し、実感してほしいと思っている。

（栗田直樹）

次世代を担う
子供たちに

次世代を担う子供たちに帯広の森づくりにかかわってもらおうと、3回目の植樹祭の年（'77年）に隊員で発足した。

昨年までに約800人の卒業生が巣立った。指導員として隊にかかわり続ける卒業生も多く、現在はジュニアリーダーの中学生から社会人の指導員経験者。2、3年前から隊員OBの子供が入隊し始め、感慨もひとしおだ。帯広の森はまさに自然の「学校」。森づくりはまちづくり、そして人づくりでもあることを改めて感じる。

森林療法や
芸術活動も

まとまった土地を確保できず植樹祭は今年で終わるが、30ヘクタールが残っている。今後は子供たちを中心に学校単位などでの植樹を考えていきたい。

植樹から育樹へ森づくりが移っていき、森をどう利活用していくかが今後の課題。自然観察はもちろん、憩やしの効果がある森林療法や芸術活動など市民に森を利用してもらうための体制づくりなどを進めていく。

よく帯広の森を散策するきっかけに、普段着の感覚で帯広の森を利用してほしいと思し、実感してほしいと思っている。

（栗田直樹）



苗木を植える森の少年隊の隊員たち。森で自然の大切さを学んでいる（1995年5月14日）

2004年（平成16年）5月14日
十勝毎日新聞

市民植樹祭と私〈中〉

森との接し方、使い道考えて



イノタニ造園土木部次長
渋谷洋一さん(49)

【略歴】1954年、帯広市生まれ。73年東盛木材（現・ケイセイ）に入社。74年から旧十条製紙（現・日本製紙）の釧路緑化事業所に出向、「帯広の森」にかかわるようになる。植樹祭実行委員会には11回目となる85年から参加。

帯広の森とかかわるようになったのは、1977年、旧十条製紙（現・日本製紙）の釧路緑化事業所に出向しているときだった。当時、帯広市から委託され「帯広の森」構想実現のため奔走していた土木園芸コンサルタントの牧野道章さんの手伝いを、事業所でしていたことがきっかけだった。事業所内で私が造園の知識を持つ人間がおらず、牧野さんと深くかかわるようになった。

寒風に強い
樹種を選定

ここまで森が成長するのにいろんなことがあった。初めてわかるもの。例年なら知らないが、寒風被害は冒険した春先になって植樹祭まで残り1カ月という短期間だったが、十勝管内中の苗木業者に連絡を入れてなんとか3000本の苗木を用意したこともあった。

30人がかりで
前処理5千本

また苗木の掘り取りという作業がある。これは養生のため仮に植えた苗木1本の大きさを1尺近くにした。大きくなった分だけ余計、掘り取り作業に手間もかかる。予想していたよりはるかに大変で、植樹祭前日までかかったこともあった。

今でこそ帯広の「森」の呼び名だが、かつては帯広の「やぶ」と、やゆされることもあった。植樹以前の畑だった状態をまだまだこれからだ。今知る身としてこの森を見ると感慨深い。振り返れば5000本もあり、30人で3、4日で終わらせたこともあった。

ほかにも植樹祭の参加人数が増えるにつれ、一人当たりの苗木の数を少なくしなければならず、樹木を植樹するのに掘り起こす作業なのだが、多い年は5000本もあり、機で掘できなくなり、代わりにチョウセンゴヨウやゴヨウマツ、ブンゲストーといった寒風被害に強い木を用意する必要があった。

植樹祭まで残り1カ月

遭った。前年に植えたトドマツやエゾマツ400本の9割近くが先枯れして真っ赤になった。今後を考えると植樹する苗木の種類を変えなければならないと、寒風被害に遭った。前年に植えたトドマツやエゾマツなどが急きょ植



帯広の森は今後、育成・管理が課題に（昨年10月の市民育樹祭）

以上が当たり前であり、森をつくる行為につながると感じる。帯広の森の時点では何も評価できないが、時の流れにゆだねながら、注意深く森の成長を見守りたい。何十年と森を育て続けることで「帯広の森」の方向性が決まってくる。

ただ市民には常に森との接し方や使い道を考えてほしい。木の寿命は100年以上と自体、とかく自然を壊す行為につながりやすいからだ。私自身も機会があれば将来を担う子供たちに植樹指導してほしいと思う。

森づくりに
終わりなし

植樹祭は今回で終わるが、森づくりは終わらない。人が森に入ること自体、とかく自然を壊す行為につながりやすいからだ。私自身も機会があれば将来を担う子供たちに植樹指導してほしいと思う。

（田島工幸）

2004 年（平成 16 年）5 月 16 日
十勝毎日新聞



帯広の森で最後の市民植樹祭

30年の歴史4500人で幕

「第30回帯広の森市民植樹祭」（同実行委、市主催）が18日午前10時から、帯広の森で行われた。あいにくの曇り空となったが、88団体と個人を合わせた約4500人の市民が、カシワやミズナラ、エゾヤマザクラなど4600本を4・5ヘクタールに植えた。参加者が豊かな森の成長に思いをはせ、植樹祭は30年の歴史に幕を下ろした。（2、23面に関連記事）

帯広の森づくりは「市」（農民は「今回まで参加した市民の思いを今後も反映させていくのがわれわれの務め」と述べた。

長（故人）の発案で始まった。植樹祭には今回までに延べ14万8000人が参加、約1333ヘクタールに約23万本を植樹。まとまった土地が確保できないため、最後を迎えた。

午前10時からの式典は、吉村元市長のみゆき夫人（90）からのメッセージとして「この森を『帯広の宮造への願き土産』と言った夫の仕事が完了し、本当にうれしい」との祝辞。

来賓の姉妹都市の大分市から参加した緑の親善訪問団長、磯崎翼治副市長が「帯広の森が今後も心のふるさとであり続けることを期待する」と祝辞。

続いて、植樹祭に参加した竹内凱君（大空小6年）、中川真利奈さん（清川小6年）の2人が「この森を『帯広の宮造への願き土産』と言った夫の仕事が完了し、本当にうれしい」との祝辞。

植樹祭参加の子どもたちを代表して、竹内君と中川さんが「21世紀に誇れる森になることを願います」と宣言した。

植樹会場では最後の記念植樹が行われ、砂川市長、磯崎団長、高橋実行委員長、鈴木孝昌市議会議長らがカシワの木を植えた。参加者は、スコップなどを手に苗木1本1本に「立派な森に育ちますように」と願いを込め植樹に汗を流した。終了後は仲間たちとバーベキュー（栗田直樹）

カシワを植える関係者。左3人目から高橋実行委員長、森の少年隊の竹内君、中川さん、磯崎副市長、砂川市長、田本憲吉元市長、高橋幹夫前市長、鈴木孝昌市議会議長、後藤一裕大分市議会副議長。左端は大分いきいきレディ。右端はとかち青空レディ（18日午前10時40分、金野和彦撮影）

帯広、大分の両市が交流を深めた歓迎レセプション



森をきずなに末永く親善を

植樹祭参加の大分市訪問団 歓迎会を開催

帯広の森市民植樹祭に参加するため、帯広市の姉妹都市・大分市から緑の親善訪問団（団長・磯崎翼治大分市副市長、団員40人）が15日、来帯した。同日午後6時からは歓迎レセプションが帯広グランドホテルで開かれ、親ぼくを深めた。

訪問団の植樹祭への参加は2回目で、延べ1030人、1620本を植樹している。

57人が参加。砂川敏文帯広市長が「帯広の森をきずなにして末永く親善を深めたい」とあいさつ。大分の磯崎副市長は「100年先を見据えた壮大な事業に参加できて光栄」と述べた。続いて、鈴木孝昌帯広市議会議長、後藤一裕大分市議会副議長、高橋幹夫実行委員長があいさつ。下山一知JALセールス帯広支店長の発声で乾杯した。

出席者は十勝の食材を使った料理に舌鼓を打ち、歓談。最後に大分合同新聞社襲設局の竹永敏郎事業部長の発声で万歳して締めくくった。（栗田直樹）

2004 年（平成 16 年）5 月 16 日
十勝毎日新聞

2004年（平成16年）5月16日
十勝毎日新聞



会場には次代の森づくりを担う子供たちが多数参加、豊かな森に育つよう願いを込めて植樹した（16日午前10時40分、折原徹也撮影）

「雄大な森に」願い込め

名残惜しみ最後の植樹祭

「雄大な森に成長して」―。最後の植樹祭となった第20回帯広の森市民植樹祭は16日午前9時すぎから、会場の帯広の森に家族連れや団体などが次々と繰り出した。参加者は「本当に寂しい」と名残惜しんだ一方、「今後は育樹に力を」と期待を込める市民も。気温は昨年より5度低い11度（正午現在）で肌寒い曇り空だったが、参加者たちはまきまきを息いを胸に、植樹に汗を流していた。（栗田亘寛、吉川隼介、田島工幸）

森の少年隊は「また来たい」

○…第3回植樹祭から帯広の森を支える「森の少年隊」は今回、隊員、指導員を含めて約80人が参加した。植樹するカシワはドングリのころから成長を見守ってきた。それだけに植樹に寄せる思いは強く、大空小学校6年の小田嶋槙君（11）は「これで終わるのはさみしい。また森に来たい」と感慨深い表情。スコップに四苦八苦せず、元気いっぱいに苗木を植えた。

総勢140人の外国人は感動

○…JICA研修員やれんが第大の留学生ら約30カ国以上の市内在住外国人総勢140人が大挙参加。にぎやかに植樹を終え、記念撮影や焼き肉を楽しんだ。ベルーから来日したばかりのJICA研修員、マリア・サンチェスさん（35）は「自国ではこんなイベントがないので初めての経験。多くの人が集まって木を植えるのは素晴らしい」と感動していた。

帯西幼稚園の90人も笑顔で

○…「ヨイショヨイショ」。掛け声に合わせて親子で木を植えたのは帯西幼稚園の90人。安藤美来ちゃん（4）は「木を植えるのは楽しい、また来たい」と笑顔。母親の治美さん（33）は「子供と一緒に木の成長を見守れたらも見守りたい」と語った。普段はなかなか自然に触れ合う機会が少ないとあって、植樹を通じ成する子供の姿に親たちも思わず顔がほころんだ。

シニアネット「節目を記念」

○…「節目が重なり、いい記念になりました」。中高年がパソコンを使って交流する団体「とかちシニアネット」の高橋寛理事長（63）。昨年7月のNPO（民間非営利団体）法人化を記念して西幼稚園の90人。安藤美来ちゃん（4）は「木を植えるのは楽しい、また来たい」と笑顔。母親の治美さん（33）は「子供と一緒に木の成長を見守れたらも見守りたい」と語った。普段はなかなか自然に触れ合う機会が少ないとあって、植樹を通じ成する子供の姿に親たちも思わず顔がほころんだ。

市議ら31人が25本を植える

○…市民植樹祭より一足早く16日午前8時半から、帯広市議会議員会（白井警治会長）と帯広市議友会（山本忠次会長）は、「森の交流館・十勝」（西20南8）の導入路沿いにナツツバキやアカエゾマツなど25本を植えて森づくりを進めた。31人が協力して高さ約3mのナツツバキにスコップで土をかぶせた。

石井会長は「今年で5回目。さまざまな帯広の森への貢献です」と話していた。

チームワークでわずか15分ほどで植え終える。

記念撮影ではニッコリ笑顔が咲いていた。

参加者の声

第1回から参加、成長見守る

高木健揚さん（64）＝無職　第1回植樹祭から参加しています。植えた木が成長しうれしい。植樹の機会はなくなるが、森の成長を見守りたい。

大きく育つのが楽しみ

吉田幸代さん（38）＝看護助手　最後だと聞いて20年ぶりに参加した。続けてほしいと思いますが、この森が大きく育つのを見るのもワクワクします。

定年記念以来、続けて参加

芦川啓さん（69）＝無職　16年前に初参加し、定年記念植樹して以来毎年参加している。終わるのは寂しいけど、これから育樹していくのも楽しみです。

結婚記念で思い出の地に植樹

高橋一志さん（29）、志津さん（29）＝会社員　思い出のある帯広に結婚記念で木を植えました。今は当小牧に住んでいますが、成長した木を見に来たい。

場所も覚えておきたい

神谷志穂さん（11）＝花園小6年　花壇づくりはしていますが、植樹は初めて。ちゃんと大きく育つように、丁寧に植えました。場所も覚えておきたい。

子供の成長後に見に来たい

土田義和さん（41）＝会社員　最後の植樹祭なので家族4人で参加しました。子供たちが成長したら、大きくなった木を一緒に見に来られるといい。



豊かな緑育って

「帯広の森」で最後の植樹祭　4千500人参加

大規模な市民参加の植樹祭として知られ、三十回目を迎える今回が最後となった「帯広の森市民植樹祭」が十六日、市内西二五南六を会場に開かれた。あいにくの曇り空の下、市民のほか、帯広の観光文化姉妹都市である大分市から訪れている親善団も交え四千五百人が、四・五ヘクタールの敷地に四千六百本の苗木を植えた。（田中雅章）

開拓で失った森を市民一人一人の手で再生させようと、故吉村博元市長が発案した植樹祭は一九七五年にスタート。これまでに延べ四万四千人が二十二万四千五百本の苗木を植えた。

最後の市民植樹祭、高橋幹夫前市長（右から5人目）、田本喜昌元市長（右から6人目）、砂川恵文元市長（右から7人目）の歴代3市長も記念植樹した

今年植樹したのはカシワやミズナラなど十種。開会式では砂川恵文元市長があいさつした。

「まとまった土地がなくなり、植樹祭は最後だ」と話していた。

森の少年隊のつっこが丘小五年の吉田まりかさんが「たくさんの植物が自生する森になることを祈ります」と宣言。参加者は家族や友人たちとスコップを手に苗木一本ずつを一挙に植えた。第一回から今回まで連続二十回の参加した主婦高田アサエさんは「とても寂しいですが、子供たちのために豊かな森に育ってほしい」と話していた。

2004年（平成16年）5月17日
北海道新聞

帯広の森訪れる頻度は？

「年に数回」7割

「行事や情報少ない」

アンケート集計

三十年間にたって行なっていない実われ、今年で終了した帯広の森市民植樹祭（帯広市、実行委主催）の参加者に事前に用紙を配り、五百九十四人から回答を得た。

「帯広の森を訪れる頻度」については、「植樹祭や、間伐などを行う恒例行事の育樹祭以外に森と触れあう機会がない」に40・6％、「帯広の森の自然などに関する情報が少ない」に36・9％が続いた。

（斎藤郁）

2004年（平成16年）8月19日
北海道新聞（夕刊）

帯広の森って 市民と疎遠？

植樹祭参加者2100人に調査

帯広市などは4日までに、帯広の森に関する意識調査結果をまとめた。「年に数回訪れる」と答えた人が最も多かったのに対し、「ほぼ毎日」「週に数回」訪れる人は少なかった。森づくりに携わる人でも、植樹祭（今春終了）や育樹祭のほかに訪れる機会が少ないことが分かった。市は「今後の参考とし、多くの市民に、より一層親しまれる森づくりを進めていきたい」としている。（深田隆弘）

帯広市民が森を訪れる頻度について、市民が133人が答えた。

行事以外は訪れず 「年に数回」が7割超

帯広の森では、1975年から、市民が133万本植樹した。30年目の節目を迎えた今年、植樹祭が行なわれず、「ほぼ毎日」「週に数回」と答えた人が各4％にとどまり、「ほぼ毎日」「週に数回」はそれぞれ7・2％、5・4％となったため調査の植樹祭を開いた。ただ、「森づくりは一つに終わったわけではない」（市）として、今後の森づくりに向けての意識を探った。植樹祭に参加した市民21％が28・5％、「散策・休憩」が25・8％だった。森について評価できることでは、「植樹、育樹活動を通じ森づくりに参加できる」（37・7％）が続いた。

問題点として、「植樹祭、育樹祭以外に森と触れ合える機会が少ない」（40・6％）との意見が最も多かった。今後の森づくりについては、「市民が日常的に利活用しやすい環境づくり」を求める声（39・7％）が最も多かった。

帯広の森意識調査

今後の森づくりに求められる取り組みは？

主な回答のみ抜粋（複数回答）



2004年（平成16年）8月4日
十勝毎日新聞

帯広の森 市民育樹祭

秋晴れの下、森づくりに汗



39団体950人が参加 下枝払いや間伐を実施

帯広市民が植えた樹木を手入れし、森を育てる「第14回帯広の森市民育樹祭」（実行委員会、帯広市主催）が17日午前10時から、市内西22南5で開かれた。秋晴れの下、個人、39団体合わせて約950人が参加、樹木の成長を妨げている枝を払い落としたり、生育の悪い木を伐採するなど、森づくりに汗を流した。（深田隆弘）

帯広の森では1975年から今年までの30年間、延べ14万7850人が参加し、1332・9ヘクタールに55種類22万7600本を植えた。この間、生育は「ノコギリが折れるか」「斧」と話していた。

帯広市民植樹祭は今年5回と区切るほど力が必要だった。

育樹祭も今後、在り方を検討することになっている。

2004年（平成16年）10月17日
十勝毎日新聞

森の大切さ 小学生ら実感

間伐、枝打ち…真剣に

帯広 市民育樹祭で750人

第十四回帯広の森市民育樹祭（実行委員会主催）が十日、帯広市内の、帯広の森」で開かれ、市民が間伐や下枝切り作業に精を出した。

一市民が育てた森を手入れしよう」と、毎年行っている。

今年は市内の町内会や企業、小学生ら約七百五十人が参加。一九九二年、九五年に植樹した合わせて約七・二ヘクタールの区画で、カシワやハルニレなど約一万三千本を対象に間伐、枝打ちなどの作業に励んだ。



ノコギリなどを使い、一生懸命に下枝切り作業に取り組む子供たち

あいさつし、森の少年隊メンバーで大空小五年の芽野真子さんが「自然の大切さをふたりで大事なまを守っていきたい」などと元気に「育樹宣言」した。

冒頭、砂川敏文市長がそれの持ち場に向かい、専門家の指導を受けながら、細い枝や育ちの悪い木をノコギリなどで切り取っていた。

その後、参加者はそれぞれ（北海道新聞）

2004年（平成16年）10月18日
北海道新聞

帯広の森

育樹方法を検討へ

樹木成長、市民だけでは困難

帯広市民が植えた樹木の健を手入れし、育てる「帯広の森市民育樹祭」の実行委員会は、17日午前11時半から、市内の過去の植樹地3カ所を見学し、帯広の森での今後の育樹方法を話し合った。

帯広の森では1975年から30年間、延べ14万9800人が55種類約227万9800本を植えた。樹木が成長する一方で、市民による手入れが難しくなってきているのが実



過去の植樹地を見学する帯広の森市民育樹祭の実行委員ら（17日正午ごろ、帯広市南町）

情は「プロの手でしだけばならず、市民が手入る限界が出始めている。今後の取り組みを実行委で論議したい」と話し

2004年（平成16年）10月18日
十勝毎日新聞

2004年（平成16年）11月21日
十勝毎日新聞

帯広の森30周年記念シンポ

「将来像」で意見交換

120人参加 利活用の可能性探る



「帯広の森」の30年間を振り返り、これからの在り方を考えたシンポジウム（左から、司会の山田英和帯広の森市民植樹祭実行委員会事務局長、パネリストの砂川市長、金清代表、堀之内会長、太田氏）

「帯広の森30周年記念シンポジウム」が20日午後1時半から市内の寿御苑で開かれ、市民ら約120人がこれからの森づくりの在り方を考えた。

森づくりの歩みを知り利活用の可能性などを探ろうと、市と市民植樹祭の金清典広代表が「後世のために生育状況などがきちんと記録されればいい」とエゾリスの会会長の堀之内清志会長が「管理センターのような施設を造り市民が開伐材で好きなものをつくれるようにすべきだ」と訴えた。

また、花園小学校学校評議員の太田道子氏は「いまは『運動施設の隣が森』と受け止められているが、『森に運動施設がある』という認識ができるようになれば」と述べていた。（梁田隆弘）

（シンポジウムの採録は27日に掲載）

（2面に関連記事）

川市長ら4人のパネリストが意見交換。高野ランドスケープ・プランニングの金清典広代表が「後世のために生育状況などがきちんと記録されればいい」とエゾリスの会会長の堀之内清志会長が「管理センターのような施設を造り市民が開伐材で好きなものをつくれるようにすべきだ」と訴えた。

2004年（平成16年）11月27日
十勝毎日新聞

帯広の森 未来像探る

30周年記念シンポジウム

基調講演「森を知り、育て、楽しむ」

環境林づくり研究所所長
斎藤新一郎氏



ヘクロフィルレベル9.3年、横浜生まれ。北海道大学農学部林学科卒。北海道庁林業試験場、帯広大学の勤務を経て、現在は環境林づくり研究所所長として自然再生などの研究活動に取り組んでいる。主な著書に「木と動物の森時記」「春・夏・秋・冬なるほど植物の森時記」「秋冬なるほど植物の森時記」秋冬なるほど植物の森時記」

現状は「間引き」必要

手入れに問題も

帯広市民が「帯広の森」をつくり始めて今年で30周年を迎えたことを記念するシンポジウム（市など主催）がこのほど、市内の寿御苑で開かれた。「環境林づくり研究所」所長の斎藤新一郎氏が「森を知り、育て、楽しむ」と題し基調講演、砂川敏文市長、花園小学校学校評議員の太田道子氏、高野ランドスケープ・プランニング代表の金清典広さんが「考えよう これからの帯広の森」をテーマに、意見交換した。司会は、帯広の森市民植樹祭実行委員会の山田英和事務局長が務めた。（文・梁田隆弘、田島一幸、写真・山下慶）



砂川敏文氏



堀之内清志氏



金清典広氏

山田 帯広の森への思い

■人の活動考えて

金清 青柳（現帯広、故人）さんの「農民開墾魂」は、すごいなと思った。私は18年ほど前、東京から来たが、こんなまちづくりをしているところがあり、しかも市民と森をつくっているというのは、すごいなと思った。

だが、実際に始まると、人と森のかかわりが、希少種に感じた。帯広の森は、スポーツ施設があり、運動公園という印象だった。木製遊具を置き、（管理センターに）出入りする雰囲気がなくなれば、環境ボランティアのような人たちが出てくるのでは。環境教育、自然教育、管理の3本柱を考えないと、帯広の森は市民が集う場所になっていないのでは。樹好家の住宅が周辺にも増えてほしい。

山田 帯広の森を通じてどんなまちづくりがイメージされているか。

太田 野球場から見える日高山脈がいつもすてきだ。帯広の森が、今年初めて「百樹の森」に認定された。木に植えられた名札を見ながら、樹木の名前を覚えたり、木の実を拾ったりしている。

堀之内 環境ボランティアのような人たちが出てくるのでは。環境教育、自然教育、管理の3本柱を考えないと、帯広の森は市民が集う場所になっていないのでは。樹好家の住宅が周辺にも増えてほしい。

山田 帯広の森を通じてどんなまちづくりがイメージされているか。

太田 野球場から見える日高山脈がいつもすてきだ。帯広の森が、今年初めて「百樹の森」に認定された。木に植えられた名札を見ながら、樹木の名前を覚えたり、木の実を拾ったりしている。

堀之内 環境、景観、森林セラピーという形で、森や林が育ってきたことに対し、維持管理費用の捻出に大苦労している。帯広の森は、年間3500本くらいの苗木を植えている。現在の森は、植えっぱなしの状態で、いずれ、間伐材は50センチ分の1の木くらいしか取れない。

斎藤 間引きが必要な森ができるのは、100年先だ。

堀之内 100年先の話をしていても始まらない。手入れについても問題がある。木の成長を助けるために、帯広の森に最も必要となるのは「間引き」。現在の管理が必要な森ができるのではないか

「帯広の森市民植樹祭」の歴史 32分の映像に

DVDが完成

300枚を無料配布

昨年五月で三十年の歴史に幕を閉じた「帯広の森市民植樹祭」の映像を収めたDVDがこのほど、完成した。製作にあたった植樹祭の実行委員会は、三百枚を市民に無料配布する。

植樹祭は開催で失われた森の緑を回復しようと、一九七五年に始まり、三十年間で市民が百三十三ヘクタールに約二十三万本の木を植えた。実行委は植樹祭の歴史を後世に伝えるため、DVDの製作を進めてきた。

DVDには、過去の植樹祭や育樹祭の映像、帯広の森の四季の表情のほか、森づくりに参加する市民団体の活動などを紹介。長く植樹祭に携わってきた関係者のインタビューも収録している。

映像は三十二分。DVDは実行委事務局の市公園と花の課（市役所内）で、先着三百人（一人一枚）に配布される。問い合わせは同課☎0155・24・4111内線1842へ。（須藤良彦）



30年の森づくりの歴史を収録したDVD

2005年（平成17年）2月26日
北海道新聞（夕刊）

市民植樹祭DVDに

実行委 30年間の活動収める



帯広の森市民植樹祭実行委員会（富樫基文委員長）は、市民協働の森づくりの軌跡をたどるDVD「街を抜けると森がある 帯広の森30年の軌跡」を300枚製作、無料配布する。

1975年から市民と共に進めてきた「帯広の森植樹祭」が昨年、30年の節目を契機に終了したのを記念して製作した。行委員会（富樫基文委員長）は、市民協働の森づくりの軌跡をたどるDVD「街を抜けると森がある 帯広の森30年の軌跡」を300枚製作、無料配布する。

1975年から市民と共に進めてきた「帯広の森植樹祭」が昨年、30年の節目を契機に終了した四季折々の風景を織り交ぜながら、市民と森が共に歩んできた歴史を32分間の中に収めている。

DVDは市公園と花の課（市役所5階）で配布。なくなり次第終了する。問い合わせは同課（24・4111内線1842）へ。（宇田若子）

2005年（平成17年）2月23日
十勝毎日新聞

花や草木を観賞

自然観察会・春の森あそび



帯広の森の自然観察会「春の森あそび」が22日午前10時から、市内西22南5の同森内で初めて開かれた。家族連れらは木漏れ日が降り注ぐ森の中を、花や草木を観察しながら散策し、休日のひとときを楽しんだ。

昨年終了した市民植樹祭に代わるイベントで、市、エゾリスの会（堀之内清恵会長）、森の回廊の十勝（磯野商弘代表）の主催。植樹や育樹以外で森に親しんでもらおうと企画した。

好天に恵まれたこの日は、親子ら約50人が集合。団体メンバーの手引きで森に入り、カシワやクルミなどに触れて木の特徴をつかめたり、白い花が咲くオオバナノエンレイソウなど森の中特有の植生に目を見張っていた。食べられる野草を採取して、てんぷらにするなど、野趣あふれる味も堪能した。

参加した市内の松井萌鈴ちゃん（6）＝稲田小1年＝は「松ぼっくりがいっぱいとれた」と大喜び。父の基純さん（37）＝公務員＝は「豊かな森の自然を実感できた」と話していた。堀之内会長は「森は新しい発見や楽しみの宝庫。気軽に楽しめることを発信していきたい」と語っていた。自然観察会は秋にも行われる。（栗田直樹）

2005年（平成17年）5月22日
十勝毎日新聞

青空の下 植樹に汗

帯広の森 小規模は今後も継続

森の里小児童



晴天の下、植樹した森の里木の子供たち（20日午前10時半ごろ、山下直撮影）

帯広の森の植樹が今年も始まった。豊空が広がった20日、市内の森の里小学校（内山民生校長、児童508人）の子供たちが、苗木を1本ずつ寒に植え、汗を流した。

市民植樹祭は昨年の30回を最後に幕を下ろしたが、小規模の植樹は今後も続ける。今年度は西22南5の0・6haに園児や児童・生徒ら約560人が、森の少年隊が買ったカシワやミズナラなどの苗木750本を植える。

この日は午前10時から、園児の5、6年生計約180人が参加。6年生の児童会長、杉山陽侑子さん（12）が「心を込めて植樹します」と宣言。子供たちは、慣れない手つきでスコップを使いながら、270本を植え込んだ。

初めて植樹に挑戦した、5年生の中西昊君（11）は「思ったより難しかった。大人になったら自分が植えた木を見に来たい」と笑顔で話していた。（栗田直樹）

2005年（平成17年）5月20日
十勝毎日新聞

2005 年（平成 17 年）8 月 26 日
十勝毎日新聞

帯広の森

育樹祭 今年で終了

用地・作業量確保が困難

帯広の森市民育樹祭（実行委、市主催）が今年に幕を下ろし、帯広の森づくりは今後、市民による小規模で日常的な活動を主体とした新たな段階に入る。

育樹祭は99年、植樹祭（76年開始）で市民が植えた木を、自ら枝払いや間伐を行って育成しようとスタート。植樹祭終了後、帯広の森が住民の間に定着するよう、どう育てていくかが重要と述べ、委員からは「植樹・育樹祭が終わる長し作業の危険性が増すと市民と森との接点がなくなるとの懸念や、「市が多い区域は生育が遅く、大勢での作業が難しいため継続を断念した」などの意見が出された。

今後の取り組みに関し、①一般市民向けの植樹・育樹体験行事②子供たち対象の体験学習プログラム③森の四季なら人の参加を見込み、約4・5万のカシワなど約7000本を手入れする。

育樹祭は10月16日午前、市内空港南町南10線で実施。約1000人の参加を見込み、約4輌提供の雌化一など行う。こうした森の利活用の拠点となる施設も整備していく。

さらに、森づくりを担う組織の在り方についても論議され、市民主体の受け皿を整備することで一致。市民や行政と協働して森での活動メニューの企画や提供などを行う構想だ。

林寛行委員長は「育樹祭終了後、帯広の森が住民の間に定着するよう、どう育てていくかが重要」と述べ、委員からは「植樹・育樹祭が終わる長し作業の危険性が増すと市民と森との接点がなくなるとの懸念や、「市が多い区域は生育が遅く、大勢での作業が難しいため継続を断念した」などの意見が出された。

最後の育樹祭は10月16日午前、市内空港南町南10線で実施。約1000人の参加を見込み、約4輌提供の雌化一など行う。こうした森の利活用の拠点となる施設も整備

帯広の森市民育樹祭（実行委、市主催）が今年に幕を下ろし、帯広の森づくりは今後、市民による小規模で日常的な活動を主体とした新たな段階に入る。

育樹祭は99年、植樹祭（76年開始）で市民が植えた木を、自ら枝払いや間伐を行って育成しようとスタート。植樹祭終了後、帯広の森が住民の間に定着するよう、どう育てていくかが重要と述べ、委員からは「植樹・育樹祭が終わる長し作業の危険性が増すと市民と森との接点がなくなるとの懸念や、「市が多い区域は生育が遅く、大勢での作業が難しいため継続を断念した」などの意見が出された。

最後の育樹祭は10月16日午前、市内空港南町南10線で実施。約1000人の参加を見込み、約4輌提供の雌化一など行う。こうした森の利活用の拠点となる施設も整備

散策や炭焼き体験

「市とエゾリスの会」「秋の森あそび」



枝を切る作業に熱中する子供たち

帯広の森の自然観察会「秋の森あそび」が1日午前10時から開かれ、親子連れらが紅葉を待つ森の中で、炭焼きを体験したりドングリの実を植えたりしながら、森の休日を楽しんだ。

市とエゾリスの会（畑之内満志会長）の主催。森の自然に触れる活動を通じて、帯広の森に親しんでもらおうと春（5月）にも行い、秋の開催は初めて。

親子ら約50人が参加。雨がちらつく中、炭焼きに使う高さ約8mの木が切り倒されると子供たちは喜んで駆け寄り、幹や枝をノコギリで切る作業に熱中した。

啓北小1年の谷村美佳さん（6）は「幹は硬かったけど、どんどん切れた。面白かった」と興奮気味に話していた。

参加者は同会のメンバーらと散策して木々の特徴を学んだほか、森の少年隊と一緒にドングリを植えた。昼食には豚汁が振る舞われた。（栗田直樹）

2005 年（平成 17 年）10 月 1 日
十勝毎日新聞



カツラの葉を興味深く観察する子供たち

樹木観察楽しい！

帯広「森遊び」に親子ら50人

市民が植樹し、育てた「帯広の森」と触れ合おうと、自然観察会「秋の森あそび」が一日、帯広市南町南九線周辺の帯広の森で開かれた。（立木大造）

市街地を取り囲むよう「緑」。親子やスタッフら約一五十人が参加した。

樹木観察では、葉を比べるなどしてカシワとミズナラの違いを確かめたり、紅葉すると甘く香るカツラの葉のにおいをかいだ。市の担当職員は「今年は紅葉が少し遅いですね」などと説明しながら、森を散策した。

この後、緑化活動などを行う団体「森のお年隊」のメンバーと一緒に、植樹用の苗を育てるため、ミズナラやカシワのどんぐり（種子）を植えた。

深まる秋満喫

2005 年（平成 17 年）10 月 3 日
北海道新聞（夕刊）

さようなら育樹祭（下）
帯広の森の未来



市中心部の周囲に広がる帯広の森。大空団地（左）、十勝飛行場（右）に挟まれた一帯が初期に植樹された森

「自然の財産」市民主導で論議を

今後の利活用

真っすぐに伸びるトドマツ。様先からは陽光がこぼれる。リスが高さ20近くに成長した木の幹を駆け上がっていく。ふかふかした林床を歩き、5分もたたないうちに、清涼な空気と静寂に包まれた。

帯広の森野球場から緑道を挟んだ反側に面する「記念の森」。初期に植樹され、第1回市民育樹祭の会場ともなった一帯は、最も成長が進む。その「鳥の育樹」を施していないシラカバ林は、枝が絡まり、牧草などがうっそうと生えてかつて農地だった面影を残す。

最初の植樹から30年。この対照的な光景は、育樹もたらした成果を端的に物語っている。

「親しめる森に」

「イベントが中心だった林床を歩き、5分もたたないうちに、清涼な空気と静寂に包まれた。

帯広の森野球場から緑道を挟んだ反側に面する「記念の森」。初期に植樹され、第1回市民育樹祭の会場ともなった一帯は、最も成長が進む。その「鳥の育樹」を施していないシラカバ林は、枝が絡まり、牧草などがうっそうと生えてかつて農地だった面影を残す。

最初の植樹から30年。この対照的な光景は、育樹の今後について、高橋猛・帯広市緑化植樹祭実行委員長が「森の中に入って楽しめる森づくりを目指すべきだ」と方向性を語った。

実際、同実行委が昨年実施したアンケートによると、帯広の森を訪れる頻度は「年に数回」との回答が7割を占め、利用が植樹祭、育樹祭に限られているのが現状。「日常的に利用・活用しやすい環境」を求める要望が多かった。

林光繁市民育樹祭実行委員長は「帯広の森は都市型の森林。活動拠点となる施設、散策路やサイクリングロードなどを整備して、市民が森の中に入って楽しめる森づくりを目指すべきだ」と方向性を語る。

管理センター整備

市緑化振興部は、利用や育成意識を担う「緑称・帯広の森育樹センター」の建設に向け、今年度内に基本構想をまとめ、5年以内に整備する方針だ。山内利美同部長は「森の全体が一つの学校という考え方。余暇利用などにとどまらない、教育的価値を強調するのは、森の少年隊指導委員会の島山茂事務局長。これまで約800人の子供たちを、森の育成年数が経過して、市街地の近郊に樹木約23万本の緑が広がる。思い描いていた森林の姿を測した今こそ、利用の可能性を具現化する知恵と行動が、市民一人ひとりに求められている。（栗田直樹）

知恵と行動が必要

街を抜けると森がある「帯広の森」は自然の学校。故吉村博市長が帯広の森を提唱してから35年。市民の森づくりの歩みを振り返り、"緑の財産"の在り方を探る。

市民の手で豊かな森に
帯広 育樹祭が終了

今年の育樹区画は約四ヘクタール。ミズナラやカシワなど七千二百六十本の樹木が植えられており、参加者は造園業者らの指導を受けながら、枝払いや間伐に汗を流した。（水野晋二）

「第十五回帯広の森市民育樹祭」（実行委主催）が十六日、市内の「帯広の森」で開かれ、市民約千人が枝払いや間伐に汗を流した。

春は植樹祭、秋は育樹祭で森づくりを進めてきたが、まとまった土地がなくなり、植樹祭は昨年で終了。樹木の成長に伴い作業時の安全確保が困難になったため、育樹祭も今回が最後となる。

開会式で砂川敏文市長は「育樹祭は終わりますが、自分の子供と同じように最後まで愛情を持って森を育てましょう」とあいさつ。帯広小六年の小林翔太君が「帯広の森は自然の大切さを教えてくれる場。大きく豊かな森に育てることを誓います」と育樹宣言した。

2005年（平成17年）10月17日
北海道新聞

さようなら育樹祭（上）
帯広の森の未来



健全な帯広の森の育成を願い、産声を上げた第1回の市民育樹祭。今年で終了するが、緑化意識の向上など市民に与えた影響は大きい

野趣あふれる作業、緑化意識醸成

森を育てる

「うっそうと成る森の中はまるでジャングル。探検隊気分でフコギを使って枝を払うのに夢中になった。作業後は木々の間の見通しが良くなり、充実感があった。市内に住む会社員の牧野一也さん（39）は、第1回帯広の森市民育樹祭の思い出を語る。

牧野さんは小学5、6年生が帯広の森の育成活動を行う「森の少年隊」OBのジュニアリーダーとして、中学1年の時に参加して以来、昨年まで毎回参加してきた。「植樹祭がなくなり、育樹祭に力を入れていこうと思っていたのに…残念」

管理は専門家に

15回の今年で幕を閉じる市民育樹祭。主催する育樹祭実行委員会は、木が成長し一般市民による作業の危険性が増したことに加え、1000人規模が参加するまとまった地の確保が難しいことから来年以降の継続を断念した。ボランティアや後継イベントでの育樹など育樹祭は定着。昨年の14回までで延べ1万2072人が、全体の植樹面積の3分の2に当たる76ヘクタールのカシワなど14万7743本の手入れをしてきた。

開伐や枝払いを待って健全な森に育てよう！」育樹祭を初開催した1991年当時は最初の植樹から10年が経過。同実行委の渋谷晴一会長は「植樹祭は苗木を植えるだけだった。育樹祭は、紅葉が進む森の中で家族や仲間で焼き肉をほおばり、森の新たな関係づくりを語り合う豪華な祭典だった」と振り返る。

参加者443人でスタートした初回からわずか5年で、1000人を超えるなど、育樹祭が市民の中に培ってきた豊富は消えるわけではない。市緑化環境部の山内利美部長は「植樹イベントは当たり前だが、多くの市民の手で15年も育樹が行われてきたことは誇るべきこと。"森を育てる"という意識は浸透した」と語る。

林光繁同実行委員長は「帯広は他都市と比べ、花や緑が非常に多く、市民は緑化に積極的。帯広の森づくりは転換期を迎えた。育樹祭の歩みを振り返り、"緑の財産"の在り方を探る。

誇るべき15年

しかし、育樹祭が市民の中に培ってきた豊富は消えるわけではない。市緑化環境部の山内利美部長は「植樹イベントは当たり前だが、多くの市民の手で15年も育樹が行われてきたことは誇るべきこと。"森を育てる"という意識は浸透した」と語る。

林光繁同実行委員長は「帯広は他都市と比べ、花や緑が非常に多く、市民は緑化に積極的。帯広の森づくりは転換期を迎えた。育樹祭の歩みを振り返り、"緑の財産"の在り方を探る。

帯広の森の歩み

1970年（昭和45年）		吉村博市長が「帯広の森構想」を発表
73年	11月	臨時市議会で可決
74年	3月	用地買収開始
		吉村市長辞任
	4月	田本憲吉市長就任
	5月	帯広の森市民協議会発足
75年	6月	第1回帯広の森市民植樹祭開催
77年	5月	森の少年隊発隊式
90年（平成2年）	4月	高橋幹夫市長就任
	10月	プレ育樹祭開催
91年	10月	第1回帯広の森市民育樹祭開催
92年	9月	市民育樹祭実行委員会発足
98年	4月	砂川敏文市長就任
2000年	4月	帯広の森管理センター整備を盛り込む第5期総合計画スタート
04年	5月	市民植樹祭が30回で終了
05年	10月	最後の第15回市民育樹祭

2005年（平成17年）10月14日
十勝毎日新聞

2005年（平成17年）10月15日
十勝毎日新聞

2005年（平成17年）10月16日
十勝毎日新聞



さらなる森の成長を願い作業を行う参加者（16日午前10時50分ごろ、山下撮影）

元気に育て帯広の森

最後の育樹祭
1000人作業に汗

今年で最後となる「第15回帯広の森市民育樹祭」（実行委員会、帯広市主催）が16日午前10時から、市内若葉南町南10線の会場で行われた。抜けるような秋晴れに恵まれ、37団体約1000人の市民が参加。森の豊かな成長を願いながら、間伐や下枝払いなどの作業に汗を流した。（栗田直樹）

育樹祭は市民が植えた木を自らの手で育成しようと、1991年にスタート。木の成長に伴い作業の危険性が増したことから、今回で打ち切りとなる。昨年の30回で植樹祭が終了、大規模イベント中心の森づくりは幕を閉じる。

この日は、第20回市民植樹祭（94年）で植栽した地区（約4・5ha）を会場に、紅葉するカシワやミズナラなど約7260本を対象に実施した。

式典では砂川敏文市長が「驚異に成長している帯広の森はまちづくりの象徴へ、林光緑実行委員長が「育樹を通して緑を大切にする気持ちが市民に根付いた」とあいさつ。森の少年隊の小林期太君（帯広小6年）が「もっと大きな森に成長するよう、市民の手で最後の育樹を行います」と宣誓した。

参加者はノコギリなどを使って、枯れ枝を払い落としたり他の樹木の成長を妨げる木を伐採、開けた場所にはドングリを植えた。作業後は、家族連れらが焼き肉を囲み、休日のひとときを満喫した。

毎年参加している十三虎会の舩田寛会長（67）は「大勢の市民が集う帯広の森のイベントがなくなり寂しい」と名残惜しい様子。帯広中の自然観察少年団の大澤香緒部長（3年）は「これからも森づくりにかかわっていきたい」と目を輝かせていた。

2005年（平成17年）10月18日
十勝毎日新聞

素晴らしい森目指し間伐

森の里小 帯広の森で育樹活動
学校単位の活動は継続



枝払いをする児童たち

今年で最後となる「第15回帯広の森市民育樹祭」（実行委員会、帯広市主催）の一環として、帯広市森の里小学校（内山民生校長、児童515人）の育樹活動が17日午前10時から、帯広の森で行われた。市公園と花の課は「場所の選定など課題はあるが、小学校単位での育樹活動は続けていきたい」と話している。

同校では1991年の開校以来、環境教育の一環として、高学年を対象に、春は植樹、秋は育樹活動を行ってきた。

今回で2回目の育樹活動となる6年の高山晃さん（11）は「伐採は大変だったけれど、森は必要な存在だからこれからも続けてほしい」と笑顔をみせていた。（寺田佑子）

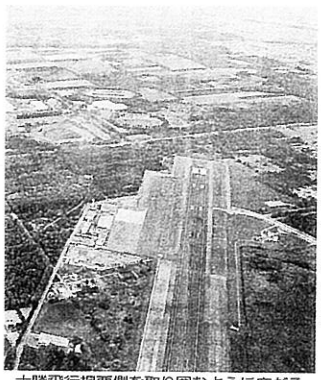
内山校長が「帯広の森を守るために頑張りましょう」と話し、6年の鏑谷妃児童会長（12）が「素晴らしい帯広の森ができるように活動していきましょう」と元気に開会宣言した。

児童は、約2kmに植えられたハルニレなどの間伐や下枝払いなどに挑戦。ノコギリを使って慎重に切った。1時間ほどで枝は山積みとなり、身長の3倍以上ある枝を持つ児童の姿も見られた。

「帯広の森」航空法に抵触

2005年（平成17年）12月19日
十勝毎日新聞

樹木2196本、高さ制限超過
陸自、市に撤去を要請
十勝飛行場周辺
市、3年間問題解決できず



十勝飛行場西側を取り囲むように広がる帯広の森。この一部1500本余りが航空法上の制限を超える（10月、山下倹撮影）

陸上自衛隊帯広駐屯地・十勝飛行場周辺にある「帯広の森」を含む帯広市の管理用地の一部樹木が、航空法上の高さ制限を超え、安全運航の障害となっているとして、同駐屯地が市に対し撤去を要請していたことが、19日までに分かった。同駐屯地と市との水面下の協議では、移植や剪定（せんてい）、伐採などが選択肢として浮上しているが、市の「100年の大計」として、市民が植樹、育ててきた樹木をどう取り扱うか。市は難しい判断を迫られている。（栗田直樹）

航空法上の制限に抵触 要請した。

するのは、帯広の森など2196本。帯広の樹木2196本。帯広駐屯地は9月上旬、幾田一目。当時約1300本の光治司令で砂川敏文市長に対し、障害となっている樹木の撤去を文書で要請した。この間、市は内部で対応を検討してきたが、

今回の撤去要請は、2002年7月に続き2度目。当時約1300本の樹木が制限を超えていた。この間、市は内部で対応を検討してきたが、抜本的対策に至らず、制限を超過する樹木がさらに約900本発生。事実上、問題解決を先送りしてきた市の責任や対応の遅れも問われることになる。



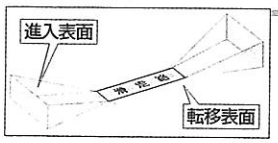
航空法第49条は、航空機の離着陸の安全を確保するため、滑走路の周囲や上空に規制する空面を設け、建造物や樹木などの高さを制限している。基準を超えた場合、飛行場の設置者は障害物の除去を求めることができると定める。

帯広駐屯地によると、十勝飛行場（全長1500㍍、幅45㍍）周辺では、滑走路の延長上に設定する「進入表面」と、滑走路の両側に設ける「転移表面」の高さ制限に樹木の一部が抵触。最長で基準を11㍍超えている樹木もあるという。自衛隊の固定翼機の発着数は今年度（9月末現在）計1040回による。

制限超過する樹木に対し、同飛行場西側に隣接する帯広の森のカラマツやシラカバなど約160㍍くまで法令に基づいて、0本が含まれる。最長で基準を11㍍超えている樹木もあるという。自衛隊の固定翼機の発着数は今年度（9月末現在）計1040回による。

制限超過する樹木に対し、同飛行場西側に隣接する帯広の森のカラマツやシラカバなど約160㍍くまで法令に基づいて、0本が含まれる。最長で20㍍近くに伸びた初期に植樹した木を中心に、成長して制限を超えた。帯広の森は、30年前から住民自ら植え、管理して重ねてきた市民の財産。市は適正な育成の目的以外は、原則、間伐や枝払いなどを行っていない。

同駐屯地と市は十数回にわたり、事務レベルで協議を重ねてきた。飛行場を運営する同駐屯地業務隊は「現段階で解決の糸口は立っていない。あ



（進入表面・転移表面）航空機が安全に離着陸するために、飛行場周辺に障害物がないよう航空法が定める空間（制限表面）で、滑走路を底に「すり鉢状」に規制する。「進入表面」は、滑走路の延長上（3000㍍）に滑走路端から50分の1の上り勾配（延長50㍍に対し上方1㍍上昇する）で傾斜する平面で、高さ制限は0㍍。「転移表面」は、滑走路の両側に7分の1のこう配（延長7㍍に対し垂直に1㍍上昇）の斜面で、水平表面（滑走路中央の上空45㍍を中心とした円周で囲まれた空間）などと接する平面をいう。高さ制限は0―45㍍。

「空の安全の妨げ」
帯広駐屯地 飛行場周辺 陸自が撤去要請
航空法 高さ制限違反
帯広の森などの樹木2200本

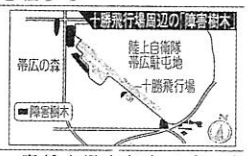
【帯広】隣接する陸上自衛隊帯広駐屯地（帯広市）内の十勝飛行場周辺に広がる「帯広の森」など市有地の樹木二千百九十六本が、航空法で定める高さ制限を超え、同駐屯地が「安全運航の妨害になる」として市に撤去を求めていることが十九日、分かった。帯広の森は市民が植樹して育ててきた森だけに、市は対応に苦慮している。

航空法は滑走路周辺の建造物や樹木の高さを規制している。十勝飛行場の場合、滑走路（全長千五百㍍）の両端からそれぞれ三千㍍と、滑走路の中心から半径二・五㌔の円内を対象に、六十㍍以下に制限。滑走路と近いほど規制は厳しく、例えば飛行場の西端から五百㍍の地点では十㍍以下となっている。

同飛行場周辺の帯広の森は一九八一年からシラカバやミズナラなどの植樹が始まり、現在、大きい木で十五㍍前後に成長。帯広の森以外でも、飛行場周辺の市有地には樹木が多い。

同駐屯地は二〇〇二年に初めて市に撤去を要請した。当時は、制限を超える樹木の一部を剪定（せんてい）（枝払い）として、性急な解決は求めない意向だ。

同飛行場は八一年から自衛隊機運用となり、本年度の発着回数は九月末現在で昨四回に上っている。



帯広の森については多くの市民が育成にかかわってきたため「いずれ撤去するにしても検討期間が必要」として、来年度中に市民検討委員会を設置。市民を交えて、剪定や移植、伐採後に樹高の低い木を植えるなどの対応を検討する方針だ。

同駐屯地は「自衛隊は市民と共存していかなければならない。市と引き続き話し合っていく」（広報）としている。

2005年（平成17年）12月20日
北海道新聞

2005年（平成17年）12月20日
十勝毎日新聞

「帯広の森」航空法抵触 撤去要請問題

陸上自衛隊帯広駐屯地・十勝飛行場周辺の「帯広の森」を含む市有地の樹木が航空法の高さ制限を超えるとして、同駐屯地が帯広市に撤去要請していた問題で、3年余りにわたって、抜本的な対策を講じてこなかった市の対応に批判の目が向けられている。市側は「慎重に検討し、駐屯地と協議してきた」と説明するが、帯広の森は住民自ら植樹、育ててきただけに、説明責任の欠如を指摘する声が強まっている。（栗田直樹）

3年半問題放置…市の姿勢に批判

「自然」「基地」求められる共存策

「育てた市民」へ説明責任欠如

「要請を繰り返すだけ。樹木をどうするかは、市が決めること」。砂川敏文市長に対し9月、航空法の障害樹木の撤去を文書で求めた帯広駐屯地。飛行場を管理する業務隊の幹部は淡々と語る。

最初の要請は2002年7月。この間、航空法の高さ制限に抵触する樹木は約1600本から、約700本（900本）で、市民植樹祭で植えたのは約820本に上る。

「大々の成長の度合いと、このうち、帯広の森や、移植・間伐の場合に限る」という条件が付いた約3年半の内部検討は現段階で、「来年度に市民を交えた対処法を論議する場をつくる」という結論があるだけだ。

「何とかなる」甘えと安全軽視

最初の植樹祭からかかわってきた関係者は「制限を超えることは当然予想できたが、真剣な議論はしてこなかったのは事実。『何とかなる』との甘い期待はあった」と内部事情を打ち明ける。

これに対し、ある市議は、帯広の森は市民がかかわってきた市のシンボル、問題の放置は、市の怠慢以外の何物でもない。早急な対応が必要だ」と会内で少なくない。

平和運動フォーラム十勝ブロック協議会の木下英治事務局長は、「民間空港から転用した飛行場の存在自体の危険性を指摘。安全軽視以外の何物でもない」と強調する。

帯広の森と十勝飛行場。自然と基地という異なる性格が共存するエリアだけに、解決の先送りは許されない。砂川市長の掲げる「市民協働」の理念と姿勢が問われている。

2006年（平成18年）3月29日
十勝毎日新聞

帯広の森 航空法抵触問題

生態系への影響抑制を

有識者らの検討会初会合



帯広の森の樹木への対応を論議した検討会の初会合

「帯広の森の航空法抵触問題で、有識者らでつくる市民組織「十勝飛行場周辺の帯広の森づくり」と陸帯広駐屯地・同飛行場周辺の帯広の森などの樹木1571本が、航空機の安全運航を確保する航空法の高さ制限を超え、駐屯地が市に撤去を要請。同森は、延べ約16万人が植樹・育樹祭に参加するなど市民の手で育てられた経緯から、市は対応策について市民が協議する受け皿づくりを進めてきた。

検討会は帯広の森づくりに実務レベルでかかわってきた市民ら委員8人で構成。座長に帯広の森検討会が28日夜に発足、市役所で初会合を開いた。

この問題は、陸上自衛隊帯広駐屯地・同飛行場周辺の帯広の森などの樹木1571本が、航空機の安全運航を確保する航空法の高さ制限を超え、駐屯地が市に撤去を要請。同森は、延べ約16万人が植樹・育樹祭に参加するなど市民の手で育てられた経緯から、市は対応策について市民が協議する受け皿づくりを進めてきた。

検討会は帯広の森づくりに実務レベルでかかわってきた市民ら委員8人で構成。座長に帯広の森検討会が28日夜に発足、市役所で初会合を開いた。

法令を順守しながら、同森の生態系などへの影響をできる限り抑制する方針で一致。障害となる樹木の伐採や芯しん止めを含め対策を検討、9月末までに結論を出し、市に提言する。

委員会の山田英和事務局長を選任した。

論議では、「特区を活用し高さ制限を下げられないか」「森に生息する動物への影響を考慮すべき」と樹木の伐採を回避し生態系に配慮する声の一方、「木々の成長と同時に支障木も増える。抜本策が必要」「高さ制限に合わせ成長しない木を植えたり、部分的に公園にしてみては」と大幅な見直しを求める提言も出た。

山田座長は「（法令上）放置することはできない。森の生態系を崩さない形で、樹木を更新していきたい」と基本方針をまとめた。次回は5月中旬に開催し、帯広の森の現地調査などを行う予定。（栗田直樹）

他の委員は次の通り。（敬称略）

▽磯野照弘（森の回廊@十勝代表）▽佐野公彦（帯広の森市民植樹祭・育樹祭実行委員長）▽渋谷洋一（同）▽関口真弘（北海道緑化建設業協会十勝支部技術委員長）▽畠山茂（森の少年隊事務局長）▽三田市則昭（ソリスの会事務局長）▽雲岡道徳（帯広営林署B）

2006年（平成18年）4月28日
十勝毎日新聞

市民の支援要綱策定

帯広の森 育成 道具や資材貸し出し

帯広市は帯広の森の育成促進及び支援に関する要綱。大勢の市民がなんらかの形で森づくりにかかわる市民団体を支援する要綱を定めた。植樹・育樹祭の終了後も、帯広の森に携わる市民協働の森づくりを進める狙い。27日午後に市役所で開かれた、今年度第1回の市緑化審議会（丸山純孝委員長）で示された。

名称は「市民団体による帯広の森づくり活動の支援要綱」と呼び掛けている。問い合わせ・申し込みは同課へ。（栗田直樹）

・育樹祭に参加した団体
・育樹祭に参加した団体と一緒にグループをつくって森づくりに取り組みましょう」

利の5人以上の団体で、植樹・育樹作業や、木材の搬出、育樹祭の終了後も、帯広の森に携わる市民協働の森づくりを進める狙い。27日午後に市役所で開かれた、今年度第1回の市緑化審議会（丸山純孝委員長）で示された。

名称は「市民団体による帯広の森づくり活動の支援要綱」と呼び掛けている。問い合わせ・申し込みは同課へ。（栗田直樹）

2006年（平成18年）5月19日
北海道新聞

陸自飛行場周辺の法抵触樹木

市民の検討会が調査

高さを測って意見交換



陸上自衛隊十勝飛行場の樹木の高さが航空法に抵触し、自衛隊が市に除去を要請している問題で、市民の代表でつくる周辺の「帯広の森」など抵触した帯広の森などの樹木の高さを測る「十勝飛行場周辺の帯広の森づくり検討会」（山田英和座長）は十八日、現地調査をした。

事務局の市職員を含め十五人が参加。飛行場の西側を中心に、飛行場の滑走路からの距離が三十五㍍～六百㍍の十一地点の樹木を調査した。

市職員が樹木の高さを測ることのできる専用ポールで「この木の高さは十三㍍あるので、この地点では十三㍍は抵触している」などと説明すると、検討会のメンバーは「この程度の高さでも抵触してしまうのか」などと驚いていた。

この後、帯広の森研修センターで開いた会合で検討会のメンバーは「せん定してもすぐに伸びてくるので、苦しく抵触している木は伐採するしかない」「飛行場のすぐ近くなど木の高さを十㍍以下にしないといけない場所は（いまある木を伐採して）果樹などの低木を植えた方がいい」などの意見を述べた。

事務局はこうした意見を参考に、七月中に対処方針のたたき台を作成、今冬にも一部で伐採を開始する予定。（志村直）

「残したい」苦渋の胸中

インサイド

帯広の森航空法抵触問題

「残したいが、切らないわけには…」。18日の「十勝飛行場周辺の帯広の森づくり検討会」の現地調査。検討会と市の関係者が目の当たりにしたのは、航空法の制限にもはや歯止めがかからない、豊かな森だった。障害樹木の伐採・植え替えを基本方針とする抜本見直しに踏み切ったが、関係者の胸中には「傷つけたくない」との思いもにじむ。帯広の森の航空法抵触問題は係全に伐採とのジレンマを抱えながら、解決に向けて動き出した。（栗田直樹）

10㍍以上も超過

十勝飛行場の西側一帯に広がる帯広の森。初の現地調査に参加した検討会の委員6人と市職化環境部の職員ら約20人を出迎えたのは、数分ごとに飛び交う陸自ヘリコプターのごう音だった。

飛行場から西側に約500㍍の地点、パークゴルフ場の中央部を横切る高さ約20㍍のカラマツ防風林は、滑走路の延長上の進入表面（制限を最大7㍍超過）。「もし幹線はもったいないが、航空法は無視できない。森づくりの抜本的な練り直しがが必要だ」。帯広の森を「ようやくいい森に成長してきた。傷つけるのは途中で切れば異様だ」と指摘する。

飛行場の先端に20基余り残っている。飛行場の先端に20基余り残っている。飛行場の先端に20基余り残っている。

森の恵み 次世代へ

エゾリスの会が発足20周年

「一緒に里山つくりませんか」

今年度の活動スタート



帯広の森内にある自然林の表土移植先で調査と除草作業を行う会員たち

発足20周年を迎えた市民団体「エゾリスの会」が帯広の森で取り組む「里山をつくろうプロジェクト」の今年度の活動がこのほど始まり、会員たちが自然林の表土を移植したカシワ林の中、植生を調査しながら除草作業に汗を流した。同会の堀之内清志会長（68）は「子孫のために良い状態で森を残したい。楽しみながら自然と付き合う活動に興味ある人を増やしたい」と話している。



堀之内清志会長

同会は1986年、帯広を中心に自然観察会やエゾリスの生息調査を実施しながら、野生小動物と人が楽しく触れ合える環境づくりを目指して発足した。98年から市の許可を得て、道道帯広の森公園東の西側一帯で里山整備プロジェクトを展開している。

里山は道内ではなじみが薄いが、本州では古くから木々を伐り、苔や草環境を維持（たいひ）にする生活の一部として森の恵みを得ながら、動植物の生態を守るなどしてきた。同会は十勝で里山整備を広めた草分的な存在だ。

98年には遊歩道幅整備に伴い伐採された植田小校庭内のカシワ林の表土を、帯広の森陸上競技場で管理しやすくはいな隣接地の約30平方の区域に移植。同プロジェクトの伊藤育子リーダー（40）は「たくさんの種子を含む表土から植物を自生させ、自然林に近い状態に再生したい」と意欲を語る。

今年度の活動の初日となった18日には小学生を含む15人が参加。区域に繁殖する帰化植物のオオダチソウを取り除くなどした。付近にスズランの自生も確認した。伊藤リーダーは「昨年まで見られなかった芽や花も出ている」と話す。作業の合間には虫探しも楽しんだ。

堀之内会長は「人間が校庭内のカシワ林の表土手を加えた以上、最後まで責任をもって守っていきたい」と話していた。

（問い合わせは伊藤リーダー（34・8504）へ。）

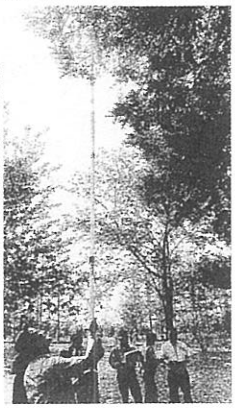
（澤井花）

2006年（平成18年）6月26日
十勝毎日新聞

航空法に抵触 帯広の森

市民が植えた木 残せないか

市が一部伐採の方針 特区などで回避案も



樹木の高さを調べる市民検討会のメンバーら＝5月18日

市民が植樹してきた帯広の森の樹木のうち、自衛隊十勝飛行場に隣接する2196本が航空法の高さ制限に抵触している問題で、帯広市は市民検討会などとの協議の結果、基本的に伐採の方向で調整を進めている。

航空法では、滑走路の「トンマツなどが抵触しており、最高で十数メートルしている樹木がある。

延長線上に、滑走路の端から五十分の一のこう配（五十数メートル上が（る）よりも高い障害物の設置を禁じている。また滑走路の側面は七分の一のこう配で禁じている。

陸上自衛隊帯広駐屯地によると、同飛行場での飛行機の飛来は年間約百五十回で、「離着陸に支障をきたす」として、市現在、同飛行場に隣接した帯広の森と周辺の森にあるカシワやミズナラ、年の二回にわたり除去要請を行った。

これを受け、市は市民の代表で組織する検討会を設立し協議した。しかし、航空法の滑走路周辺の障害物に関する規定は厳しく、五月中旬に開かれた二回目の会合では「もはや伐採するしかない」「代わりに薬樹などの低木を植えよう」などとの意見でまとまった。

航空法に抵触している部分の幹や枝だけを切ってすぐに伸びてくるため、市は隣接にたっていた樹木そのものを、早ければ今冬にも一部伐採する方針。

これに対し、伐採本数を減らせないかとの提言もある。「緑豊昭市議、共産）は「市は、伐採後の森のイメージ図を作るなど、市民にもっと説明責任を果たすべきだ」とした。

帯広の森は五年に一度、当時の吉村博市長の発案で植樹が始まった。高度経済成長時代に環境重視の施策を掲げたとして全国的に有名になった。延べ五万人の市民が植樹を行った森の行方が注目される。

2006年（平成18年）7月4日
北海道新聞

帯広の森 航空法抵触問題

伐採跡に「野草園」整備

市民検討会 広葉樹に芯止めも

「帯広の森」の航空法（しん）抵触問題で、市民有識者らでつくる「十勝飛行場周辺の帯広の森づくり検討会」（山田英和会長、委員8人）は20日夜の第3回会合で、同法の高さ制限を超える障害樹の芯止めに関する基本方針を決定。今回の協議で、基本方針に基づき、跡地利用する方針を固めた。制限や樹木の保全策に盛り込んだ。再生・管理計画の

は、幹の上部を切る芯止め）を限定的に認行し、経過を観察していくことも決めた。

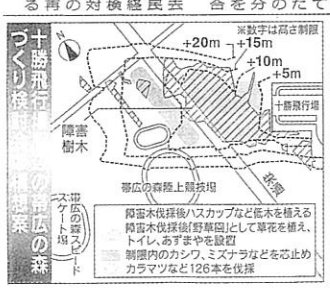
検討会は5月、同森の樹林調査計1571本を伐採し、制限に合った樹相に誘導する基本方針を決定。

しかし、樹木の多くが制限を超えていることから、伐採跡地に草花を植えて「野草園」として整備する方針を固めた。制限以下のカシワなど伝統樹

策に向け、9月までにまとめる提言に盛り込む考え。

整備が完成した場合、駐屯地内2カ所目。

＜帯広の森航空法抵触＞帯広駐屯地の陸上自衛隊十勝飛行場（帯広市）周辺の航空法制限区域内に、市民有識者らでつくる「帯広の森づくり検討会」が植樹した約2196本の樹木が抵触している問題。帯広市は、検討会の提言を受け、年度内に再生・管理計画を策定する。



検討会は「市民の植えた木をできる限り残したい」との認識で一致。カラマツなどの針葉樹と異なり、カシワやミズナラは幹を切っても芽が出てくることから、こうした広葉樹が多い米通西側の一部で、樹木の上部3分の1程度を切る芯止めを例外的に行う。成長具合をみて、他の両翼樹木にも適用していく。

このほか、飛行場先端のカラマツ126本を芯止めし、帯広の森スピードスケート場（帯広の森陸上競技場）側の制限区域外はバッサリカップなどの低木に植え替え、両翼側500平方の区域のカラマツ126本を早期に伐採することを確認した。

（栗田直樹）

2006年（平成18年）7月21日
十勝毎日新聞

2006年（平成18年）7月26日
十勝毎日新聞

森の少年隊に総理大臣表彰

30年間の活動を評価

緑化推進連絡会議

緑化推進運動への功績があった個人や団体をたたえる緑化推進運動協会（会長・中川昭一農水相）の内閣総理大臣表彰に、帯広市の「森の少年隊」（岡田翌瑠会員長）が選ばれた。管内からの同賞受賞は初。帯広の森や市内の河川敷への植樹など、30年間にわたる地域の緑化への活動が評価を受けた。26日午前11時半から東京都内の首相官邸で表彰式が開かれた。（安田敏教）



首相官邸で開かれた表彰式で小泉首相（右）と対面、激励される森の少年隊の岡田翌瑠君

国の関係省庁で構成する同会議が推薦を受けて表彰し、今年度は全国で24の個人・団体、道内から2団体が選ばれた。小泉純一郎首相が参加して表彰式が行われ、高橋指導委員長と隊員の帯広柏小6年、岡田翌瑠君が出席した。

森の少年隊は1972年5月に発足し、現在は隊員38人、指導員ら4人が所属する。活動の柱の1つに緑を育てる緑化作業があり、帯広の森や十勝川、札内川などの河川敷へ植樹をしている。これまでにエゾヤマザクラなど1600本、ヨドガワツツジ120株を1万1800平方㍍に植えた。2001年度の全国植樹祭では一九八四年に帯広市で行われた「森の少年隊」の植樹

2006年（平成18年）7月27日
北海道新聞



帯広「森の少年隊」総理大臣表彰

緑化「認められうれしい」

桜1600本など植樹

三十年にわたる植樹活動などが評価され、本年度の緑化推進功労者内閣総理大臣表彰を受けた帯広市の「森の少年隊」（高橋猛文指導委員長）は、「今後の活動の励みになる」と喜んでいる。（西田美樹）

今回、表彰されたのは一個人二十三団体。十勝では一九八四年に帯広市で行われた「森の少年隊」の植樹祭以来、二十一年ぶり2回目。

5月に帯広の森で行われた表彰式に出席した帯広柏小六年の岡田翌瑠君（十二）は「取り組みが認められてうれしい」と話す。

六年生三十七人で、二十六日に首相官邸で行われた表彰式に出席した。

同隊は一九七七年発足。毎年、帯広の森や十勝川の河川敷などに植樹してきた。これまでにエゾヤマザクラ千六百本、ヨドガワツツジ百二十株を約一万二千平方㍍に植えた。

隊員は緑化作業だけでなく、自然観察やキャンプなどを通じて仲間とのきずなを強めており、晶山茂少務局長は「楽や学校のクラブ活動にはない、横のつながりが生まれている。今後もこうした居場所を維持し、環境への意識を高める手伝いをしたい」と話している。

2006年（平成18年）9月3日
十勝毎日新聞

90㌢×180㌢の白い板50枚キャンバスに

みんなで自由に絵を描こうよ

23日 帯広の森でワークショップ

楽しい帯広・十勝を表現

秋の一日、みんなで絵を描こう！。縦90㌢、横180㌢の白い板50枚に自由に絵を描く「帯広の森ペインティング・ワークショップ」（開催委員会など主催）が23日、帯広市の帯広の森スピードスケート場裏側芝生広場で開かれる。自由な発想で、楽しい帯広・十勝を絵で表現しようという試み。完成した板は「十勝子ども雪合戦」の盾にも使用される予定で、雪合戦の観戦と一緒に絵も鑑賞できるというユニークさが注目を集めそう。（本内のぞみ）



開催委（園口好文会長）と市生涯学習フェスティバル実行委、市教委が主催し、市スポ振興財団総務課協力。会長で、帯広塗装工業協同組合（谷橋徳一理事長で、プランAC（園口代表）、造園一世会（小高良樹会長）が共催。

スポーツの拠点に加え、生涯学習の視点にも必要事項を記入、市教委生涯学習課（〒080-0014 帯広市西4南13 とかちプラザ内）へ郵送が持参、ファクス（22・5955）、電子メール（social_education@city.obihiro.hokkaido.jp）で15日までに申し込む。問い合わせは同課（22・7915）へ。

帯広の森の樹木を観察する参加者

2006年（平成18年）9月24日
十勝毎日新聞

樹木調べ自然に親しみ

22人参加し帯広の森自然観察会

帯広市緑化環境部公園緑地課が主催する「帯広の森自然観察会」が24日午前9時半から、帯広の森内の「芝園」周辺で行われた。大人や親子連れが森の木々を歩きながら、樹木を観察して楽しんだ。

市民22人が参加。十勝グリーンインストラクター協会会員の案内で、図鑑を片手に帯広の森に植えられた54種類の樹木のうち、37種類の名前と特徴を調べた。

参加者はばらばらの方向から森に入ってきたため、集合場所の公園入り口に戻ってきた際に、「樹木調べ」に代わるものとして、昨年度から実施。帯広の森に対する市民の関心を高め、利用してもらうきっかけづくりを目的としている。（安藤智一郎）

カシアア」や「ハルニレ」とアイヌ文化との関係などについてインストラクターの話に聞き入っていた。夫婦で参加した南町の山谷孝次さん（62）は「名前を知っていても実は知らない木が多い。自分で歩いて調べてみたくなった」と話していた。

岡半は、昨年度まで実施してきた「樹祭」

百里香

2006年（平成18年）9月30日
北海道新聞

「抵触樹は伐採」基本

帯広の森問題で検討会が提言書 3区域に分け植栽

陸上自衛隊十勝飛行場（木の高さが航空法に抵触）周辺の「帯広の森」の樹木について、陸自が帯広市に伐採を求めている問題で、市民検討会（山田英和座長）は29日夜、伐採対応策を検討している「十勝飛行場周辺の帯広の森づくり検討会」（山田英和座長）は二十九日、提言書をまとめた。同法に抵触する樹木は伐採したうえで、新たな植物を植えることを基本方針とした。市はこの提言書に沿って対応する方針で、市民が植樹した樹木の伐採は避けられない状況になった。

提言書は、既に航空法に抵触している樹木は直ちに伐採し、ほかの樹木は同法に抵触する高さになったものから順次、伐採するとした。

その上で、対象区域を、同法が定める樹木の高さ制限の違いに応じて①「草原」的区域②「里山林」的区域③「広葉樹」的区域―の三つのゾーンに分け、それぞれの地域で新たに草花や、針葉樹に比べて樹高があまり高くならない広葉樹を植えていくとした。

このうち、高さ制限が最も低く、大部分の樹木が伐採されるとみられる「草原」的区域には、ユリやアヤメ、ササ、ツツジなどの草花を植え、あずまやトイレを設置する。また、市民が自家用車で乗り入れやすいよう、付近に駐車場の設置も検討する。

このほか、対象区域内の鳥やエゾリス、モモンガなどの小動物の生息調査を行い、巣が確認された場合は樹木伐採による影響が最小限になるようにすることも求めた。

検討会は、陸自の樹木一掃伐採費約2億円を予算化、帯広の森市民植樹祭のメンバーなど計八人で今年三月に発足、議論を交わしてきた。（石橋洋）



提言書をまとめた検討会のメンバーたち

2006年（平成18年）9月30日
十勝毎日新聞

植生3種に再整備

市民検討会提言書 支障木の伐採後に

「帯広の森」航空法抵触問題



十勝飛行場周辺の森づくりイメージ

「帯広の森」の航空法抵触問題で、市民有識者らでつくる「十勝飛行場周辺の帯広の森づくり検討会」（山田英和座長、8委員）は29日夜の第4回会合で、同法の基準を超過する森林一帯を再生・管理する提言書をまとめた。支障木の是正案として、将来成長して制限を超える樹種も含め伐採を基本に、高さ制限に比例して「草原」「里山林」「広葉樹の森」の3種の植生に再整備することが柱となっている。（栗田直樹）

検討会は座長の砂川敏文・帯広畜産大教授ら市民有識者9人で構成。2002年7月、昨年9月に撤去を要請。森づくりに市民延べ16万人が参加した経緯から、市民有識者の検討会を3月に発足して4回の会合で対応を協議してきた。

へ「帯広の森」航空法抵触問題▽陸上自衛隊帯広駐屯地・十勝飛行場周辺の帯広の森の一部（約50ヘクタール、樹木1571本）を含む市有地の樹木2196本が、航空法の高さ制限を超えているとして、駐屯地が市に

提言書によると、基本的な考え方に関し、「同法の制限は航空機の安全運航、周辺市民への安全確保のために必要」とし、可能な限り自然の要素を用い、樹種、植生の見直し、森の再生を待つ」と明記。是正方法や森の将来像、環境への配慮なども盛った総合的な内容となっている。

同法の規制は飛行場から離れるほど制限が緩す仕組み。制限が最も低い滑走路延長上の「草原」区域に再形成する。逆に、滑走路から離れた広い制限の区域は、樹高が伸びる針葉樹を伐採し、リンドウやツツジなどの草本や中低木に植え替え、野草園のような「草原」区域への配慮も含め伐採を基本に、高さ制限に比例して「草原」「里山林」「広葉樹の森」の3種の植生に再整備することが柱となっている。（栗田直樹）

検討会は座長の砂川敏文・帯広畜産大教授ら市民有識者9人で構成。2002年7月、昨年9月に撤去を要請。森づくりに市民延べ16万人が参加した経緯から、市民有識者の検討会を3月に発足して4回の会合で対応を協議してきた。

提言書によると、基本的な考え方に関し、「同法の制限は航空機の安全運航、周辺市民への安全確保のために必要」とし、可能な限り自然の要素を用い、樹種、植生の見直し、森の再生を待つ」と明記。是正方法や森の将来像、環境への配慮なども盛った総合的な内容となっている。

同法の規制は飛行場から離れるほど制限が緩す仕組み。制限が最も低い滑走路延長上の「草原」区域に再形成する。逆に、滑走路から離れた広い制限の区域は、樹高が伸びる針葉樹を伐採し、リンドウやツツジなどの草本や中低木に植え替え、野草園のような「草原」区域への配慮も含め伐採を基本に、高さ制限に比例して「草原」「里山林」「広葉樹の森」の3種の植生に再整備することが柱となっている。（栗田直樹）

帯広の森「抵触樹伐採」の提言書

「声聞いてない」植樹の市民反発

調整の余地あったと批判も

検討会「航空法に従うしか…」

特報

市民が三十年にわたって植樹した「帯広の森」。陸上自衛隊十勝飛行場に隣接し、航空法の高さ制限に抵触する樹木を直ちに伐採することを基本とした、帯広市の「十勝飛行場周辺の帯広の森づくり検討会」の提言書に、疑問の声があがっている。検討委は四回の議論で「航空法の規定に従うしかない」としたが、植樹した市民からは「市民の意見を聞く場がなかった」「自衛隊と調整の余地はあったはず」と批判している。（石橋亮）

帯広の森は、開拓で失った森を市民の手で再生しようと一九七五年から二〇〇四年まで毎年「市民植樹祭」を実施。延べ十四万四千人の手で二十二万四千五百本の木が植えられた。

航空法では、滑走路の延長線上は、滑走路の端から五十分の一のこう配（五十㍍進んで一㍍上がる）よりも高い障害物の設置を禁じている。このため陸上自衛隊帯広駐屯地は、二〇〇一年と〇四年に同法の高さ制限に抵触する二千百九十六本の樹木の除去要請を行った。

市はその後同駐屯地と協議を続けたが、今年三月、植樹祭実行委員三人を含む市民八人で構成する同検討委を設置し、四回目の九月二十九日に提言書をまとめた。提言書では同法に抵触する樹木の伐採し、ほかの樹木は、抵触する高さになったものから順次伐採するとし、高さ制限に応じ①「草原」的区域②「里山」的区域③「広葉樹」区域―の三つのゾーンに分けた。それぞれの地域では、新たに草花や、針葉樹にくらべ樹高があまり高くならない広葉樹に植え替えるとしている。また、エゾリスやモモンガなど小動物の巣を発見した場合、移動空間を確保し樹木伐採による影響を最小限にするとしている。

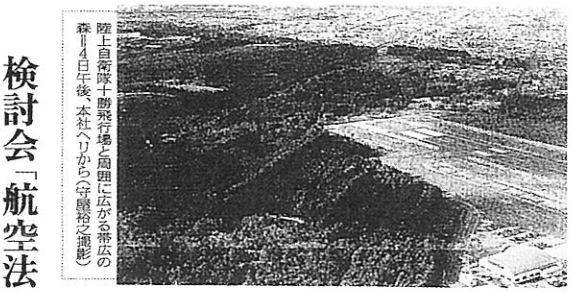
市公園と花の課は「自衛隊機の安全運行を確保するとともに、新しい森づくりに取り組みたい」としており、提言書をもとに十月末までに策定する計画案を、市のホームページで公開し、市民の意見を募集するとしている。

同飛行場が自衛隊機専用となったのが、植樹開始から遅れて六年後の一九八一年だったこともあり、同駐屯地は「自衛隊は市民と共存するのが基本姿勢」と性急な解決を求めなかった。今回の提言書について同駐屯地は「内容を精査している段階でコメントできない」

植樹祭が始まったころ参加した市内の会社員男性（54）は「高度経済成長期に行った掘削重視の事業は私の誇りだった。自衛隊機の安全運行を確保できなかったのか」と語る。

稲葉典昭市議（共産）は、特区の申請や滑走路を南側に移動させることで、同法の高さ制限のクリアーを図るなどの方策を提案していた。稲葉市議は「植樹にかかわった人を含め幅広く市民に問題提起すべきだ」と市の姿勢を批判する。

七年前に植樹に参加した市内の主婦（52）は「提言書を出す前に、市内各地で意見を聞く場や公開討論会を開くべきだ。拙速だ」と話している。



陸上自衛隊十勝飛行場と周囲に広がる帯広の森＝4日午後、本社ヘリから（守屋裕之撮影）



2006 年（平成 18 年）10 月 6 日
北海道新聞

陸自飛行場周辺の森林 高すぎる樹木伐採へ

帯広市

【帯広】陸上自衛隊帯広駐屯地（帯広市）内の十勝飛行場周辺に広がる「帯広の森」など市有地の樹木二千百九十六本が、航空法で定める高さ制限を超え、同駐屯地が「安全運航の障害になる」として帯広市に撤去を求めた問題で、市は十日、カラマツなどの対象樹木を伐採する方針を固めた。市民が植樹して育てた樹木の伐採に、一部市民は反発している。

市が対応策の検討を依頼した市民組織「十勝飛行場周辺の帯広の森づくり検討会」が同日、伐採を基本とする提言書を提出したのに対し、砂川敏文市長が提言書に沿って対応する意向を言明した。既に航空法に抵触している樹木は来年度に伐採し、ほかの樹木も同法に抵触する高さになったものから順次伐採するとした。その上で対象区域を、同法が定める樹木の高さ制限の適用除外区域①「草原」的区域②「里山林」的区域③「広葉樹」区域―の三ゾーンに分け、各区域で新たに植樹に参加した市内の主婦らには「検討会の議論と並行して、公聴会や討論会を開き、植樹に汗を流した市民の意見を反映するべきだった」との対応を批判した。

帯広の森では二〇〇四年まで三十年間、市民植樹祭が開かれてきた。同飛行場周辺では大きな木で高さ十五㍍ほどに育ったり、同駐屯地は〇二年から撤去を求めていた。

2006 年（平成 18 年）10 月 11 日
北海道新聞

帯広の森再整備を提言

検討会、砂川市長に



砂川市長に提言書を手渡す山田座長（右）

「帯広の森」の航空法抵触問題で、市民有識者らでつくる「帯広の森づくり検討会」の山田英和座長は10日午前9時半、市役所で砂川敏文市長に、支障木の伐採を基本に、3種類の植生に再整備することを柱とする提言書を手渡した。

陸上自衛隊十勝飛行場周辺で、市民が育成した樹木1571本などが航空法の高さ制限を超え、陸自帯広駐屯地が市に撤去を要請している問題。3月から対応を協議してきた。（植生には）多様性をもたせたい」と語った。

市はこれを受け、10月中にも同飛行場周辺の帯広の森の再生・管理計画案をまとめる方針だ。（栗田眞樹）

2006 年（平成 18 年）10 月 10 日
十勝毎日新聞

間伐材などでリース作り

森の回廊@十勝がワークショップ



間伐材などを使ってクリスマスリース・ツリーを作るワークショップがこのほど、帯広の森で開かれた。参加者は森を散策しながら松ぼっくりや木の実、山ぶどうのつるなどを集め、リース作りを楽しんだ＝写真。

育樹や間伐を通じて森づくりに取り組むボランティアグループ「森の回廊@十勝」（磯野照弘代表、会員12人）の主催。2004年から開催し3回目。スタッフを含む25人が参加した。

松ぼっくりや木の実を拾い集めた後、のこぎりを使って間伐材となったトドマツの枝を切る「森づくり作業」も体験した。

リース作りでは、つるを丸めて台を作り、松ぼっくりや木の実を使いながら、飾り付けした。母親と姉の3人で参加した帯広柏葉小学部3年の西田紗彩さん（8）は「去年も参加したけど今年はのこぎりを初めて使えたので楽しかった」と話していた。（井上朋一）

2006 年（平成 18 年）11 月 14 日
十勝毎日新聞

2006年（平成18年）11月14日
十勝毎日新聞

帯広の森

「草原」「里山」などに再整備

市が計画案まとめる 航空法抵触解消へ

「帯広の森」航空法抵触問題で、帯広市は13日までに、同法の制限を超える森林一帯を再生・整備する「十勝飛行場周辺の帯広の森づくり計画」をまとめた。除雪樹木を順次伐採し、高さ制限に合わせ、「草原」「里山林」「広葉樹の森」の3種類の植生に再整備する。14日午後の市緑化審議会に提出。20日の建設委員会を皮切りに議会論議を経て、今年度内に最終決定する。

同計画案は、森づくりの基本指針「帯広の森造成計画」（1982年）に反映させた。市は陸上自衛隊帯広駐屯地との補償協議も進め、来年度以降に着手したい考えだ。

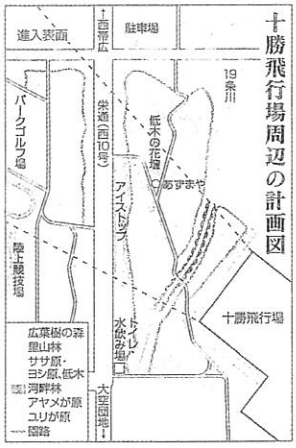
計画案によると、対象は飛行場周辺の約12・1㌶。①航空制限に対応②自然保全を活用③環境に配慮④市民に利用されるーの4方針を明記した。

高さ制限が10㍍以下と最も低い制限区域（約4・9㌶）と、支障木を伐採後、ツツジなど低木のほか、ササ、ヨシ、ユリアヤメの草花を植える。園路やあずまやを整え、この「野草園」を目指す。

10―15㍍の制限区域は山菜採りなど市民が利用できる「里山林」（約5㌶）を形成する。針葉樹を伐採する一方、カシワやミズナラなど広葉樹は切り株から新芽が伸びる特性を生かし、一部伐採。市民が植えた樹木を残しつつ、生物多様性を促す。

制限が15㍍以上の一帯は「広葉樹の森」（約2・2㌶）。樹高20㍍以内のカシワやアオダモなどに植え替える計画。（栗田直樹）

〈帯広の森＝航空法抵触問題＝陸上自衛隊帯広駐屯地と十勝飛行場周辺の帯広の森で、市民植樹を含む1万1一本が航空法の高さ制限を超過。駐屯地が2002年、昨年に撤去を要請した。



十勝飛行場周辺の計画図

2006年（平成18年）11月19日
十勝毎日新聞


ドングリから芽生えた苗の移植作業に励む参加者（18日午前9時半、折原敏也撮影）

苗木の移植に汗

帯広の森で自然観察会

帯広の森の自然観察会「初冬の森を楽しもう」が18日午前9時から、帯広の森運動公園パークゴルフ場北東側の帯広の森周辺で行われた。夫婦や親子連れが、森を散策しカシワやミズナラの移植作業をしながら自然との触れ合いを楽しんだ。

帯広市の主催。森づくりの大切さや楽しさを知り、帯広の森への理解を深めてもらおうと昨年度から開催している。今年は6月に続き2回目で、冬時期の実施は初めて。

親子ら14人が参加。帯広の森を拠点に活動を続ける市民団体「エアリスの会」（堀内淑美会長）のメンバー12人が案内役を務めた。参加者は、白い息を吐きながらドングリから芽生えたカシワやミズナラの苗をスコップで掘り取り、南側の道路沿いの移植場所に運んで丁寧に植えつけた。

親子で参加した市内の鈴木尚醒君（森の里小4年）は「スコップで掘るときは木の根が邪魔で大変だけど楽しい。元気に育ってぐんぐん伸びてほしい」と話していた。

作業後、参加者は同会のメンバーらと森林内の散策を楽しんだ。（新目七恵）

2006年（平成18年）11月20日
十勝毎日新聞

帯広の森 障害木一部伐採

計画策定前、2.5ヘクタールで

市「通常の間伐の一環」

航空法抵触問題



国路沿い一帯に伐採された樹木と切り株が並ぶ帯広の森（19日午後3時50分ごろ、市南町南6線北側）

陸上自衛隊・十勝飛行場の「帯広の森」航空法抵触問題で、市が高さ制限を超える障害樹木の一部を伐採していたことが、20日までに分かった。同問題の発覚後、障害樹木を伐採したのは初めて。同問題に対し、市は再整備計画を策定中で、陸自帯広駐屯地と補償協議を進め、伐採する方針を示していた。「通常の間伐作業の一環」（市緑化環境部）としているが、問題解決に向けた従来の説明対応との矛盾が顕呈した形で、今後、論議を呼びそうだ。

伐採の対象となったのは、森の交流館・十勝八千代側の国路沿い。行場の敷地がみえ、現場は「大量の事前伐採」とも言える状況だった。

市公園と花の緑による樹齢約19年の会場で、今年度当初に管理費2～10万円を計上。市内の建設会社に委託し、チップにして林床に敷き、帯広駐屯地との伐採

の補償協議をまとめ、来年度にも整備に着手する。

今回の樹木伐採に関し、市緑化環境部は「年度当初からこの一帯で予定していた間伐作業。針葉樹が密集しているので、林床に光を当て、2次的に生える木々の成長を促すために行った」と説明。整備計画の区域外での伐採で、昨年までに市民植樹・育樹祭が終わり市民の森への関与が薄る中、市の対応の一貫性と説明責任が、今後問われそうだ。

「帯広の森」航空法抵触問題

陸上自衛隊・十勝飛行場周辺の「帯広の森」航空法抵触問題で、高さ制限を超える障害樹木の原則伐採などを柱とする市の計画案に対し、市民論議を求める声が高まっている。計画は市民有識者8人の提言書に従って作成し市緑化審議会で了承されたが、より広範な市民合意を得ていないからだ。市民ら延べ16万人が植樹・育樹にかかわった帯広の森。「通常の間伐」と称し支障木約50本を〝先行伐採〟した事実も浮上し、森を育成・管理する市の姿勢に、疑問の声も上がっている。（栗田直樹）

再整備へ市民論議必要

50本を〝先行伐採〟

市の姿勢に疑問の声も



「間伐」で切り倒された帯広の森の樹木。支障木約50本が伐採された（19日、南町南6線北側）

問題をめぐっては、帯広駐屯地から市は障害樹木の撤去要請を受け、市民有識者らが「十勝飛行場周辺の帯広の森づくり検討会」（山田英和座長）を発足。8委員は「法令違反の状態は是正させざるを得ない」と原則伐採を決め、「草原」「里山」「広葉樹の森」の3種の再整備を市に提言した。市は13日までに、これを全面採用した計画案を作成した。

市議会も慎重対応求める

14日の緑化審議会で、計画案を全会一致で了承。20日には市議会建設委員会に報告され「早急な伐採と樹種変更は明確な変化を伴う生態系を損なわず、市民意見を十分取り入れて『編集典昭市議』と慎重対応を求める意見が上がった。市は今年度内に計画を正式決定し、是正に着手する従来方針を示していた。

結婚や出産の記念に植えた木

金属10円に及ぶ針葉樹が根元から切られ、幹が折り重なる。ウオーキングコースとして人気のある市内南町南6線の帯広の森園路。その北側一帯の「間伐」現場だ。

市公園と花の緑による「当初から予定していた間伐の一環」として、先月から業者に委託しチョウセンゴヨウなどを伐採。約2.5ヘクタール3割間引き、チップにして林床に敷き詰めるという。この中に障害樹木が約50本含まれていた。

森の近くに住む主婦（66）は「結婚や出産の記念に植えた木もある。立派に成長した木を惜しいで切らなくても…」と困惑する。ほぼ毎日、森を散歩する60代の無職男性は「切らなければいけないのは分かるが、市民の意見を聞く機会を持つべきだ」と主張。住民に映る市の姿勢に疑問を抱く市民は少なくない。

素案、「結論」を急ぐ「環境ではなくなった。支障木伐採の調整をめぐる市と駐屯地との事務レベル協議は5カ月間を要し、市は最初から今年度にも目指していた伐採を来年度以降に持ち越した。議論する十分な時間が生まれた格好だ。

市緑化環境部は「計画素はホームページで公開し、提案を募集する。今後は年に4回ほど行っている自然観察会やワークショップで市民に計画の理解を得ていきたい」（北川鎮司同部長）と説明。ただ、市民説明会などで直接より幅広い意見を集める考えはない。「100年の大計」として、構想から80年余り生じ来の課題に直面する今こそ、「市民の森」の原点に立ち返り、市民議論を経て、合意形成することが求められている。

帯広の森 航空法抵触問題の経過

2002年	7月	陸自帯広駐屯地が「航空法に抵触する十勝飛行場周辺の市有地樹木約1300本の撤去を要請
05年	9月	駐屯地が2度目の撤去要請。障害樹木約2200本（帯広の森約1600本）に拡大
	12月中旬	同問題が発覚。市が協議会設置の方針を表明
	同下旬	砂川敏文市長が記者会見で「新たな管理計画が必要」と語る
06年	1月下旬	市は市議会建設委員会で今年冬にも伐採する方針を示す
	3月下旬	市民有識者8人でつくる検討会の初会合
	10月上旬	市民検討会が「障害樹木を原則伐採、3種の植生に再整備する提言書を市に答申
	11月上旬	市と駐屯地との補償協議継続で伐採は来年度以降に
	同中旬	市が再生・管理の計画案をまとめる
	同	市が障害樹木約50本を「通常間伐の一環」で伐採

2006年（平成18年）11月27日
十勝毎日新聞

2006年（平成18年）12月6日
北海道新聞

「帯広の森」づくりに協力　元サラリーマンや主婦ら旗揚げ

植樹や自然観察へ「サポーターの会」



来年から活動　幅広い参加呼び掛け

帯広の森で植樹や自然観察を行う市民団体「帯広の森サポーターの会」が発足した。これまで自然保護活動とは無縁だった元サラリーマンや主婦ら七人が来年から活動を始める予定で、会長を務める団体職員丸山勝さん(六四)＝帯広市＝は「帯広の森づくりに関心ある人なら誰でもどうぞ」と参加を呼び掛けている。（石綿敦）

帯広の森で活動するには、自然観察会などをしは管理する市の承認が必ているが、帯広の森を活要で、同会は本年度中に拠点とする団体は同会申し出する。既に承認されが初めてとなる。た団体は現在、二団体あ

同会は、丸山さんが退職後、「これまでお世話になった地球に、自然保護活動で恩返しをしたい」と思い立ち、友人らに呼び掛けて設立準備を進めた。

帯広の森では、陸自十勝飛行場周辺の樹木が航空法の高さ制限に抵触しているため、市は来年度からこの樹木を伐採し、新たに広葉樹や草木を植える再緑化を進める。同会はこれに協力したり、児童らを対象に自然観察会を実施する計画だ。

丸山さんは「専門家の集まりではないが、豊かな森づくりに役立ちたい」と意欲を語る。団体職員で同会事務局長の佐藤晃さん(六七)は「次世代に帯広の森を引き継ぐためにも、幅広い世代に参加してもらえれば」と話している。問い合わせは佐藤さん☎0155・34・2875へ。

2006年（平成18年）12月6日
十勝毎日新聞

帯広の森を育成しよう

森を愛する市民有志　サポーターの会発足


「一緒に森づくりを」とメンバーを募集する丸山さん（左）と佐藤さん

森を愛する市民有志が、ボランティア団体「帯広の森サポーターの会」を発足させた。育樹作業や、子供らが森に親しめる活動などを展開する。メンバーは元サラリーマンなど退職者が中心で、〝現役時代〟から温めてきた森づくりへの思いを実現していく。代表の丸山勝さん(64)＝帯広市在住＝は「マイペースで取り組みたい」と語っている。（栗田直樹）

メンバーは森の自然や環境保護に興味がある50―70歳代の7人で、うち5人は仕事の第一線から退いたリタイア組。培ってきたスキルや経験を「好きな森の育成活動」に、と、4日に市内で設立総会を開き結成した。

きっかけは、丸山さんが今年8月、庭の手入れなどの仕事をしていた帯広市シルバー人材センターで、事務局長の佐藤勇さん(65)＝同＝と出会ったこと。国・道有林の育成ボランティア経験があるほど「森好き」の丸山さんは、「自然を守る活動に興味があった」という佐藤さんとすっかり意気投合した。

今後は月に一度例会を開き、来年から本格的に活動する。帯広の森でごみ拾いや間伐のほか、伐採した樹木の再利用に取り組んでいく考え。帯広市の計画に従いながらクリなど実のなる木を植え、「森の中で子供たちが遊んだり、学ぶ手助けをしたい」（佐藤さん）という。

丸山さんは「みんなが気持ちよく参加して、森づくりに携われれば」と抱負。退職を控える団塊世代の〝先導〟として、「リタイアしてから趣味や居場所を探すのは大変。森が好きで興味がある人は参加を」と呼び掛けている。

申し込み・問い合わせは、同会事務局（34・2875）へ。